

for
Adult
Only

夜伽

ヨトギ

小琳

バナシ

2006 ~ 2010 Illust / Short Storys

Presented by Garyuh_Chitai in 2011 Early Summer

夜伽小嶺

イラストストーリー 01

「結婚して」と彼女は言った

ヨトキハナシ



夏休みのあいだに彼女は変わった。はじめは補修に来ていたキモブタをからかうつもりで誘惑してみただけだったのに。選修コースの夏期講習に飽きて夏休みの間は仮面優等生もちょっとお休みするつもりだった。

ところがキモブタ男の精液を胸に受けたあの日から、乳房が疼き、胸が締め付けられる。汚くて臭いチンポの記憶ばかりが頭を埋め尽くす。勉強など出来ない。我慢など出来ない。翌日も躊躇する彼を強引に呼び出しバイズリをした。キモチいい。怖いくらい気持ちいい。乳房が張っていく。ときめいて…イッてしまった。

その翌日からはもう哀願だった。チンポをください。そう言って一日中精液を貪った。そして夏休みの間、毎日毎日、一日中ペニスに奉仕して、彼女はもう彼と離れることは出来ないと悟った。日に日に巨大になっていく乳房にはもう下着は不要だった。彼との肉体の相性は常軌を逸するほど良かった。

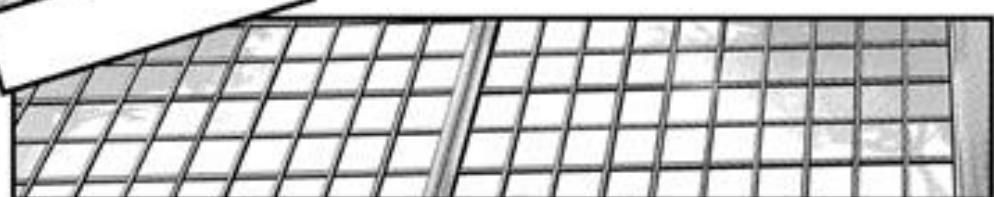
選修などどうでもいい。この人と、このチンポと一緒に生きたい。聰明であったはずの彼女は脳味噌まで落ちていた。「結婚してください」まだ一度もセックスしていない。だがバイズリだけでこんな快楽に溺れるのだ。もしこの精液が子宮に注ぎ込まれたとき自分がどうなるか…。とろけきった脳で考える。「ふ…ふふ…ウフフフ」期待と快楽と恐怖に震えながら——彼女は喰った。

目次



- p003 「結婚して」と彼女は言った（コミック TENMA 読者プレゼントサインペーパー／オリジナル）
p005 私のお尻でイキなさい（虎の穴 真鶴 EarlySummer 2010／オリジナル）
p025 はるかママがタマ姉をすごい甘えん坊にしちゃう本。（2007年冬コミ会場限定本／ToHeart2）
p033 タマ姉が春夏ママに●●●●を蹴ってくださいと哀願しちゃう本。（2008年夏コミ会場限定本／ToHeart2）
p041 夫が熟睡している横で春夏ママがタマ姉を犯っちゃう本。（2009年冬コミ会場限定本／ToHeart2）
p049 若返った春夏ママが無理矢理タマ姉に初えっちの相手をさせちゃう本。（2010年夏コミ会場限定本／ToHeart2）
p057 ブランノアリサマ（2008年冬コミ会場限定本／魔法少女アイ2）
p065 女教師美景と魔法少女リンが夏休みの自由研究を手伝ってあげる本。（2009年冬コミ会場限定本／魔法少女アイ2）
p073 キュア〇ンシャイン〇場へ森は一日 150 匹まで～（2010年冬コミ会場限定本／ハートキャッチブリキア）
p081 mama voyage（2007年夏コミ会場限定本／サムライスピリット）
p089 HONEY CATS（2006年冬コミ会場限定本／BLEACH）
p097 私のお尻でイキなさい アフターストーリー（書き下ろし／オリジナル）
p105 部長さんの就課後（コミック TENMA 読者プレゼントサインペーパー／オリジナル）
p106 あとがき・奥付（コミック TENMA 読者プレゼントサインペーパー／オリジナル）









この神社はね、代々
地元の権力者たちに
娘を差し出して存続
してきたの

この方が今宵
からお廟の「お父様」
であり

私が初めてその
ことを知ったのは
五年前

さあ紅音 お客様に
ご挨拶しなさい

え…お父様…
この方たちは？





本当に面筋だったのか
それとも激しい調教で
狂つてしまつたのか

ホレホレ 紅音のケツ穴
犯したチンボじやぞ

はあ…はあ…
ああ…んっ

企業の経営者や政治家
幼い頃から親しかつた
近所の人や学校の教師

そして実の父親や親族
までガコ「主人様」になり

あは…あ…つ

好きじやろ?
好き六のニオイ
好きじやろ?

好き…好きです…
ああ…チンボ…

すぐに そんな事は
どうでもよくなつて
いた

私のような変態女を
ケツ穴公衆便女に
してください…
ありがとうございます…

かけて…もつと…
かけてください…つ
あはあ…チンボの
ニオイだけで…
イッてしまいそう…

何年も何年もかけて
私が姦淫穴肉便器に
していくさつたの



アハハハハハハハハ



011







ああ…すごい…
濃くて…美味しい…♥

お願ひ…生きて！
そして私のお尻でチンポ
射精してほしいのつ
もつと…もつと…
キンタマ汁飲ませてつ
毎日身体中にかけてつ
♥

おまんこ

あの人たちのニオイが
酒えてしまふくらい
あなたのチンカス臭い
チンポせーえきのニオイ
ぶちまけてつ
♥

は…
一度の射精でこんな
に出したくてくれた人…
いなかつたわ

ねえ…やつぱり
ダメよ

あ…紅音さん…つ
僕も…僕ももつと
射精したいつ！

もつともつとあなたの
ケツ穴を愛したいつ！
因が…調教したいつ！
いいですよね？
いいですよねつ！

はー…
いいわ…ううん
お願い…お願いします
♥











僕のチンポも…
紅音さんのケツ穴に
調教されてるよ…



僕…あなたの尻に
ふさわしいチンポに
なりますっつ
あなたを幸せに出来る
ように…毎日あなたを
肉便器にしますからっ！







022



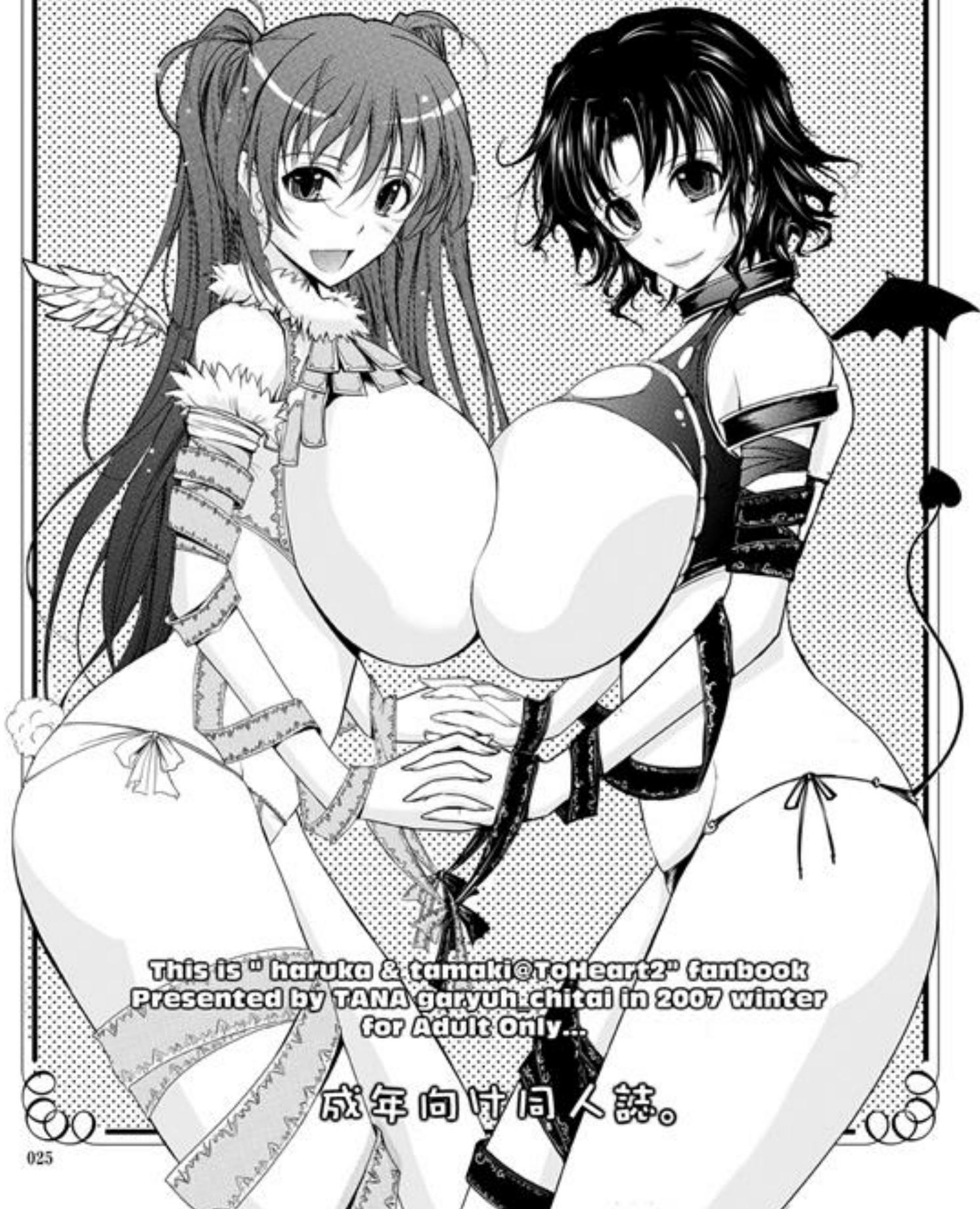
ええ、今までと違つて
たくさんの人たちと一緒に作り上げた
お祭りですものね



いやケツ穴巫女のカリスマ
となつた紅音さんを
助けて
いるだけではない
彼女たちもまた立派な
巫女として人々を導く
幸せを感じている



はるかとまがタツ姉を
すごい巨乳坊にしちゃう本。



This is " haruka & tamaki@ToHeart2" fanbook
Presented by TANA Garyuh chitai in 2007 winter
for Adult Only...

成年向け同人誌。

タマ先、おねえちゃん、お嬢
幼い頃からそのままのままのJ.J.は
嫌いじゃない。向坂家の長女として
接されるのも日常として受け入れている。
だわん、なのあるゆゆる

春香さんには違つた。
子供の頃だった、つかぬらい日も遙
全く一緒。一人の子供じとて接してく
れて、優しくして貰つたが、誰かへし
てくれた。実家でも優るのねたつ想りねたつした
けど、それにはどうしても「向坂家の
者として」こうの意味があつていて
かかへやはり春香さんの優めの方振り
万とうのは全く違うのだ。

なにか、もう子供じゃなくなつた今
でも、いいことがあつたり、恵しく
なつたり、深く悩んだりすると春香
さんに会いたいく、このあら知れない、
力妨や難二も知らない、秘密の満潮。
私は、春香さんの前ではただの子供じ
なつてしまつ、今でも、彼女の前では
ママに泣くみたい泣く「オナンナ」。

「もへ、そんなことあったの」「
「うふ……ふ……」
数ヶ月ぶりに春香さんと会つた私は
いろんなことを話した。春香さんは

私が胸を抱いて、優しい聲を震ひな
がの聞こえてくれる。
自慢したいことも、やれしいことも
黒口も、黒箱も、全然話させてくれる。
全部聞こえて、受け止めて、何も言わざ
に語してくれて、私の心を浄化して
くれる。
「あいしょ?」
「うふ~」
あつぱじを口にねむ。甘くて、やわら
かくて、キレイな笑顔をじゅらるだけで
私はしたないチンボは優しく動かして
腰元を漏らしてしまふ。

春香さんのチンボも勃起している。
包帯むきむきがいつけ。ミルクの
味とチンカスの二オイで、私の頭は
ぼうつなつてあん坊のもうひ園る
まで、彼女に身をゆだねてしまふ。
「あいしょ……春香のとおひはご
あつ……また……イク……チンボ……
チンボか……出ちゃう……うー」



「このひしゃくませ、細原様。」予約承ってあります」

年幼い娘、春菜さんは幼い頃から娘つて呼んでいた。

春菜さんの田舎むちじの服装姿。

予約名は細原春菜さん。「春菜」顔。

「おまき、お嬢の行くのも」

「はい、春…じゃあわづか…お、お母さん…」

「いじじの母と娘。歌ひ説てじれれる

心歌ひ歌ひ歌ひ歌ひ。

「お母さん…」

「お嬢の身体、キレイねー」

「お母さん…」

「あらね、おまきのチップ…私が裏うわやつねかゆ…」
「あ、いけない。お母さんもひりこり笑うと、豪傑
おねし。」
「もう一十年も前のことだもの。あの時は部屋じゅ
なべならねじとがまじてまじして…おつと泣じて
いたけど、もう大きくなれど、お力あるよ」
「その豪傑のとお母さんもひりこり笑うと、豪傑
お母さんとねぬ春菜さんの身体。私が離れが
そこにはあつた。おほいも、あまんこも、
あしづも、チップも」

「お母さんとお母さんもひりこり笑うと、豪傑
お母さんとねぬ春菜さんの身体。私が離れが
覚えかとあと同じように、春菜に甘いキスしてくれば、

「ビクン！
ビクン！」

「ハロオ……」

「ぬるぬるのたるむ…彼はしたい。見む…
お母さんよ…」

あマツコのモ、魔界、クソモ…
この一匹、もうとく魔羅せむに俺はしてた日。
それでもお母さんのモハ、私はんかようもか
つとずっと黙って居て、おじいちゃんらしい
二オイガする。少しでも強めでないとんなどか…
やっぱり体質のせいかな。わざとし便しい。

見
ま
ん
ニ
ヶ
ン

ケ
リ
モ
モ
カ
ソ
ラ
ハ
ズ
ニ
モ
モ

(
ハ
ル
ア

は
る

は
る

あ
れ
い
る

そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ

そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ
そ
く
ん
っ

「わや牛共は…甲斐云ひなごわむーー」
「あう…ん」
「おはした魔羅はやいーへ。『Jの魔式のなる。
一匹に一頭、お母さんとのむじかねをもつて
もりえる。」

「はああ…気持ちいじ…」
「はは、腹も限わり。次はクリスマスの魔つよ。お出
突き出しだ」

「ヨリヨリソリソリと魔力集中するよーー」
持ちよぐて、
カリソリカリソリと魔力集中するよーー
に甘い声が立ちやう…。そしてたつらの魔羅
をかけて朝り魔わうだじょ、あたしはまします
子供になつちゃうだの。

「見て…タマ…およいにかねよか
ケンあなた…つゆひぬだも…」

「おのれの、可憐なうぢやうぢや。じゃあお待ち
かねのおやべ、おひからあひなが」
「うふふ、うふふ、あひひ、あまのチンカスリ」
温湯の湯瓶とチンカスリの香りが
かかづた、「ううう、あひひ、あまのチンカスリ」
チンカスリ。わざわざのうづみ。
「ううう、うがめういひーーーとはああ、もじし
やだ、もう、美味しい、おここじ、オイシイつ
て言葉しか出でないな。おほほほつちやう。バカ
にならわやう。バケビにならわやう。そこな
バイーかみうわあいとじよあ…り…」



「ううう、うがめういひーーーとはああ、もじし
やだ、もう、美味しい、おここじ、オイシイつ
て言葉しか出でないな。おほほほつちやう。バカ
にならわやう。バケビにならわやう。そこな
バイーかみうわあいとじよあ…り…」

「ううう、うがめういひーーーとはああ、もじし
やだ、もう、美味しい、おここじ、オイシイつ
て言葉しか出でないな。おほほほつちやう。バカ
にならわやう。バケビにならわやう。そこな
バイーかみうわあいとじよあ…り…」



あれ…あれああつーままのちゃんはあつー
いちねんぶりつーふといのつあつもい
のあつー「へえ」とかくわやめこじーたまきはほ顔で
知るねがのいつをねるのがめめなのよね」

ほーん、ほーん

あれつー、れー、「ね…これが好きつー
わつかないで、タカくんがあされてう
まれて、ほじあレカドをあたかれて、やみつ
おひなつおひつー。
「ぶづー、ぶづー、むひじあやうー、あなた
いわづのりー、あつづて、きもちいいつー」「ひ
だ、あひりが、あたまのなが、れんざんのわ
ちやうつー、
「あひだすはんはんつー、わづ子供のウセ
しのぬね、たかひにねて、タカくんとあマ
ハーハーハーハンじやなうの、タカくんの虹
虹はんはんはあひるんじやないの、虹脚
ひじゆくわんじゆくわんじやないの、虹ひ、正
直ひ間違ねるわー」

ほーん、ほーん、ほーん

ああふー、あれつねだありー、せきつー
ぬあこうつー、ケラレアララララアリー、
いわづー、あつづて、きもちいいつー」「ひ
だ、あひりが、あたまのなが、れんざんのわ
ちやうつー、
「あひだすはんはんつー、わづ子供のウセ
しのぬね、たかひにねて、タカくんとあマ
ハーハーハーハンじやなうの、タカくんの虹
虹はんはんはあひるんじやないの、虹脚
ひじゆくわんじゆくわんじやないの、虹ひ、正
直ひ間違ねるわー」

ほーん、ほーん、ほーん、ほーん、

「うれしがこよめー、おだいじょんがねやさー
ヒーヒー、わくわくめでやんつー、まんたいや、チフ
ボもびじうどほくわくわくわー、いしのあつー」

「うみや、せんほずめは好きな人がいたとお
のあひどりたんねー」

ほーん、ほーん、ほーん、ほーん、

「うれしがこよめー、おだいじょんがねやさー
ヒーヒー、わくわくめでやんつー、まんたいや、チフ
ボもびじうどほくわくわくわー、いしのあつー」

「うみや、わくわくねー、わくわくめのウソ穴

ねねね」

「へー、あれ、あれのいもで、うそりあな
わくわくとまほのれよめあるなああつー、あひつー、
あへええつー、イク、イク、イク、イク、イク、イク、
あやはああああんつー」



「あは…おはよ…うつやう…おはよおはわ
…おはよ…」
キベニがおはよ。手一回あはわ。うつやうと
おはよ。誰もおはよおはわ。うつやう
かのうじはおはよおはわ。おはよおはわ
しりこづ。

「あは…おはよ…おはよ…」
「あは…おはよ…おはよ…」

「あは…おはよ…おはよ…」
「あは…おはよ…おはよ…」

「あは…おはよ…おはよ…」
「あは…おはよ…おはよ…」

「実は…」「ね…」
「あの、おはよおはわ。おはよおはわ

なった白な。黒の学校にゆく。朝だ。

「おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

チーフ部員のせつりはおはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

旅行会の乗りしわのば。うつやうおはよおはわ
ではない「春葉」おはよおはわ。正直、うつやう
キブクのあだりか。春葉のうきは記憶が残つ
てないひみ…大感な「おはよおはわ」おはよおはわ。

「あ、おはよおはわおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

おはよおはわ。おはよおはわ。おは

タマ姉が奇見マニアに
と哀願しすや歎つてください



18歳以上、かつ
元説の分がる成年向け同人誌。



なあがしまさやー

313

はあ

せつ

せつ

せつ

せつ

せつ

はあ

せつ

せつ

せつ

せつ

せつ

「あの、春夏さん お顔いがあるんですけど…」
「一晩中、汗と愛液と精液にまみれながら愛し合った夜明け、私はすっと抱いていた想いを打ち明けることにした。
「こうしたの、思いつめた顔して」
春夏さんは、いつもおのりの柔軟な微笑みで私を見つめる。
「あの…実は…私のキンタマ、崩ってくれませんか？」
「は？ 誰る？ キック？ な、なんて？」
「あ、あの、実は…毎日春夏さんにチンポを愛してもらっているうちに、だんだん…もつともつと強く愛されたくなってきて…。そんなとき、昔のことを思い出したんです」
「普つて？」
「タカカたわとと一緒に公園で遊んでいた子供の頃です。ある口交販者が現われて、チンポを見せつけてきたんですけど、別に珍しくも無かつたし…ちょっと好奇心が高じて…」
「その委販者の男のタマを舐ったのね」
「はい、思いつきり。そしたら委販者はものすごい声を上げて倒れてしまつたんですけど、私の足にも今まで感じたことがない感触が残つてしまつて…以来、たまにそれを思い出すと、なんだか変な気持ちになつてたんですね」
「で、自分が体験してみたい、とい」
「誰でもいいわけじゃないんです」春夏さんに設問を訊られる。そう思つと急にキンタマが疼き出していく。チンポも、ああ…ほり…こんなに…」「ダメよ」
「お顔いです…。どんな」痛くても、つるねても後悔しません、恨んだりしません。キンタマを舐つてもらえるなり向でもします！」
「何でも…そう、じゃあ『カマンしなや』」
「う…」
「1ヶ月だけね」
「え？」
そこで春夏さんはこわばつていた表情を、ようやく緩めてくれた。
「あなた…私の足の…」何も知らないでしょ」「えつと…」
「長さ、硬さ、重さ、臭、味、色、二オイ…知つてる？」
「知らない…顔やオッパイ、腕やお腹、おまんこやチンポ…普段、目にして手で触れる場所は自をぶつてでも分かるけど、足の事つてよく知らない…」

「だから、一ヶ月、私の足のことをじつ
かりと見て、触れて、舐めて、愛して、
理解しないさい。何も知らない足で、愛して、
變わりはしないわ。愛るほうだけが、春夏
ちよくないわよ。そうでしょ？」

「は…はいっ」

確かにそうだ…私は心の底から春夏
さんに感心すると同時に、改めて惚れ直
してしまった。

* * *

「おかえりなあご、ママ」

「ただいま」

「そうして、春夏さんとの新しい暮らし
が始まった。私は、彼女が外出から帰っ
てきたり、家事を終わらせるなど進んで
足をケアした。撫でて、揉んで、洗って、腫めて、文
字通り私の全身を使って彼女の足を感じ
とった。」

「どうですか、チンポ汁をローションにして
みてみたんですけど」

「素敵よ。ただでさえ、たまごちゃんのス
カルヌル感と暖かさ、そしてキンタマとチン
カスの二オイが疲れをとってくれるわね」

「あは、嬉しい……」

筋動はこの足に伝わっているだろう。なぜ
かうらこの胸の奥まで、春夏さんの足の邊も
が伝わっているのだから。

「ふふ、なつてください。胸だけじゃなく
お尻にもお腹にも顔にも、どじ」でも
足を離していくつろいでへださい。私もそ
れが嬉しいんです。」

「ホントね。私の足は力が入らなくなるく
らいリラックスしちゃってるのに、たま
ごちゃんのチンポはすぐ勃起してる」

「あん…ママのチンポだってすこじゅ
ないです。キンタマもさくらん

…精液がたっぷり溜まってる」

「私たち見詰め合うとクスクス笑って
どちらからともなく、抱き合つた。」

2週間が経つた。

私は、もうママの足で顔を撫でられるだけ射精するアタになっていた。

「寂るわよ。たまき」

「ふは…ふはう…んふううひう…」

おねだりして貰つてもらつたお気に入りの鼻フックを着けて、胸いっぱいにママのニオイを嗅いで、隣々まで舐めたりはお擦りして味わえる幸福に芽が出る。

「詰むわよ…いい？」たまき

「はじい…踏んで…ブタたまきの顔を…踏ん

で…くたさ…あ…あ…ん…ぐあ…あ…あ…

床に寝転がつた私の顔を、優しく踏むママ

形やニオイや味だけじゃない。ママが小さ

さかつた頃、足を怪我したこと、かけこ

が单かつたこと、学生時代は足の太さがコ

足のこととをたくさん知ったから。

ママの寝感は無く、更なる幸福感が私を満

たす。なぜなら、この2週間、私はママの

ニオイを嗅いで、隣々まで舐めたりはお擦

りして味わえる幸福に芽が出る。

「出来た。そこには、もう、愛しかなかつた。

「ねえ…来て…たまき…」

「は…ヒ…ふはう…ひひ…い…」

興を鳴らしてママを犯す。足にしゃぶり

つ舌ながら、そにには幸せを感じるもう一

つの理由があつた。

「あっ、たまき…」もつと、もつ

とチンポおおつ！ キンタマ汁出してつ！

ブタチンボで犯してええつ！」

そう、最近はママのほうから私を求める

ようになつてくれた。ママの身体、そして

足も私なしではいらなくなつてついた。

「ねえ、たまき…」もつと、舐めて…つ

二オイ：かいで…今日は、洗つてないか



「ん…あ…」

ひんやりとした感覚で私は目を覚ました。

「おはよう、たまきちゃん。大丈夫?」

「春夏…さん…あ…んう…う…」

「まだ動いたダメよ、疲れが引いてないん

だから。しばらくのまま寝てなさい」

どうやら気を失っていたようだった。意

識した感覚が戻ってきて、状況を理解する。

「あ…春夏さん…これ…」

「痛い?」「めんね。やりすぎわやつだ」

「ううん…気持ち…いいです…もつとくつ

つけ…べたさい…」

さっき感じた心地よい冷たさの正体は、

春夏さんの感覚だった。巨大なまでに腫れ

上がり肥大した私のキンタマにひつたりく

つついで、熱を冷ましてくれていた。

「どう? 後悔してる?」

春夏さんの感覚だった。巨大なまでに腫れ

上がり肥大した私のキンタマにひつたりく

つついで、熱を冷ましてくれていた。

「いえ、全然…。一ヶ月かけて調教してくた

さったおかげです…。気持ちよかつたとか

痛かったとか…ひと音じや言い表せないでくれ

すけど…素敵な感覚を体験できました。もうし

うこれ無しでは生きられない気がします。」

「あはは、私ちよ。たまきちゃんのキンタマ

跳ねながら私も射精してた。たまきちゃん

のこと、全部知つてた気になつてたけど、

あんな頭、あんな声、あんな感触、初めて

知つたわ。嬉しいくて、でもちょっと辛くてう

素敵な経験だったわ。ありがとう」

「春夏さん…」「…うん。あらがとう

ございます。その…これからもよろしくお

願いしますっ!」

「うふふ、…これから…ね。ますますハートに

なるわよ? あなたのクソ穴に足を突っ込

んでウンコかき回して犯した後、それをマ

ンコにつっこんで子宮まで足で犯しちゃう

かもしれないわよ?」

「あ…ほんと…ですか…? ホントに…? あ…

れんですか…? あ…痛…?」



想像しただけで、チンポが勃起し始める。

キンタマも再び熱を持って疼き始める。

「あはは? たまきちゃん、ホントに『マンブ

タナ』ね。大丈夫よ、約束する。だけ…その

前に、私がらもお願いがあるの」

「は、はい。なんでも聞きます?」

「あのね…今度は、私のキンタマ、あなたに

蹴つて欲しいのよ」

「え? ええええ?」

「あなたを調教してたしの一ヶ月、少しう

つ私の心もマツブタに乗まっていたのね。

今日、確信できた。私、あなたの姿に憧

れてしまったの」

「春夏さん…」

お願い、今度は私のキンタマを調教して、

蹴り飛ばして踏みにじって…ケロとかウソ

コとかぶらまづながらイきまくる恋活マジ

女にして……ください」

「私でいいんですか…春夏さん」

「あなたじゃないとダメなの。それと…春

夏って呼んで……」

そう言うと、恥ずかしそうに頬を染めた

春夏さんは、いいえ、私だけのキンタマメス

奴隸は、シーツの中にもぐりこんで、優し

く、私のキンタマにキスをした。

(おしまい)



成年向け
同人誌

夫が熟睡している隣で

春夏ママがタマ姉を犯っちゃう本。



私 | 向坂 雪が春夏さんのフタナリ
内便器として同居し始めてから三ヶ月が
経つたころ、長期出張に出ていた且那
さんが帰ってきた。
「ヒヒ 寂しかったかい？ 春夏」
「ええ。毎晩おマンコもチンポも疼いて
いたわ。」

「めんね、長く家を空けて。帰れるのも
不定期だし。寂しかっただろ。」
「ううん。娘ちゃんがいるから寂しくない
わ。でも、彼女キレイで可愛いでしょ？」
だから、どうしてもあなたの代わりには
なれないの。」

「春夏は汚くて臭いのが大好きだもんね。」
「そうよ……大好き……んっ……あはあ……
臭いわ。あなた……この臭いキス……久し振り
り……んう……んちゅ……んちゅる……」
甘い甘い夫婦の会話が風呂場から聞こ
えてくる。私は寂しくて悲しくて逃げ
出したかつたけれど、春夏さんからそれ
は禁じられていた。」

ヌチュ・ツ ヌチュ・ツ ヌチュ・ツ

「ああ、見ていなくて手に取るようにな
分かる……あれは、春夏さんのチンポが
且那さんのチンポとこすれ合つてる音。
いつも私としているローションチンポ
愛撫。」

「んふ……あなたのチンカスがローション
と混ざり合つて……ドロドロになつてる」
「ヒヒつ 気持ちいいよね……」 春夏
こんなので覚えたの？ ソープで
働いてるとか？」
「ひ・み・つ うふふ……」 そういうのも
あるわよ」

ペチン・ツ ペチン・ツ ペチン・ツ

「オヒツ 春夏つ、いいよつ もつと、
もつと……シヒヒつ！」
「ああ、あれも……毎日私にしてくれる
おっぱいビンタの音。やだ……悔しいよお
う！」 春夏さんが且那さんを愛してい
るのは分かるけど……これじゃまるで私が
ただの練習台みたいだよ……！」



「あはああっ！ んああ…チンボお…チンカスまみれの包茎ブタチンボ…つ素敵…もつと…クソ穴にケツマンコほじくりまわしてえつ…あああんっ！」
「春夏、ケツ毛す…いねえ。ヒヒッ、なんか帰つてくるたびに濡くなつてるとええ…そ、うよ。潤つてないの…流つてないの。数ヶ月に一度、たまにしか帰つてこれないあなたに喜んでほしいから」
「ンフー…ンフー…オホッ、春夏の腋毛、チンボみたいなニオイがするよ」「ああん…もつと、もつと嗅いで…つ！ 全部吸い込んで…味わつてえ…つ！」
「ああ…あなた…ああ…つ！」

（やだ…それは、それは春夏さんだけに嘆いでほしいのつ！ やめて…私のチンボの二才イ、嘆がないでつ…取らないで！）
春夏さんは本当のことを言つてくれない。私がキレイな女なんかじやない肉便器だということを。毎日何十回も春夏さんの身体に精液をぶつかけている淫乱チンポ女だということを。かならず排泄を春夏さんの目の前ですることを命じられ恥辱羞恥プレイにイキまるる愛戀痴女だということを…。

ブチュ！ ブリュ…ツ！ ブブラツ！

「春夏…つ！ ウヒッ！ クソ穴の中…たつぶり詰まつてるね、グチユグチユになつてるよ♪」

「んあっ、ああ…そうよ…今日ははうんちしてないから…あつ んあつ！」

（春夏さん…ああ…アナルセックスクスしてゐる…春夏さんのクソ穴の音…ああ…したい…私も…ケツ毛舐めまわして、チンボぶちこみたいつ！）
二人の愛の営みを風呂場のドア越しに聞きながら私はオナニーしていた。
春夏さんに命じられて聞き耳をたててていたのだけど、心の痛みが大きくなる一方で、チンボもひどく興奮していく。何故…？ 愛する人を犯されているのに…私、こんなに欲情している…。



「瑞ちゃん…こっちへいらっしゃい」
「……」
「こっちへきてチンポしやぶりなさい、瑞」

「……はい」

春夏さんの仕打ちに不貞腐れてい
たものの、ひとたび「命令」されれば私の本能は従順な肉奴隸として反
応してしまう。

「興奮したのねこんなに大きくして」
「あつ…んつ…ダメです…旦那さん
：起きちゃう、チンポ…見られちゃ
います…あつ、ああ…んつ」

「じやあ口をふさいであげる…」
「んつ…んつ…んうつ…ん…つ」
口に押しこまれるチンポ…身体は
心が幸福を感じるよりも早く絶頂し
立て続けに三度も射精した。

「んふ…す…い。瑞は真性のマゾブ
タね。どう、今日の味は」
「んつ…うう…つ」

春夏さんのチンポだもの。美味しい
に決まっている。だけど…やっぱ
りいつもと違った味も混ざっている。
「それがパパの味よ。一十年前
からずっとずっと私を犯してくれた
チンポの味。私をキモブタ精液中毒
の変態チンポ女にしてくれた人の味」

「……」
かなわない。夫婦なのだから当然
だけど、それでも私は心のどこかで
自分こそが春夏さんにとつて一番の
存在になつていると自惚れていた。
「泣かないで、瑞。私はあなたを
愛しているわ。だからこそ私の大事
な人のことをちゃんと知つて欲しい
の。キレイな面とかうわべだけじゃ
なく、汚らしくて醜いところも全て

「…どうして…」
「あなたは、私の肉奴隸でチンポ便器
なだけじゃない。あなたも家族。立
派な私の娘だから」

「え…? む…娘…あ…あ…」
「ふふ、また泣いてる。本当に可愛い
子ね、瑞はほら、泣きやまないと
みつともない顔、パパに見られちや
うわよ?」

「あなたは、私の肉奴隸でチンポ便器
なだけじゃない。あなたも家族。立
派な私の娘だから」

「え…? む…娘…あ…あ…」
「ふふ、また泣いてる。本当に可愛い
子ね、瑞はほら、泣きやまないと
みつともない顔、パパに見られちや
うわよ?」



「でもいきなりパパとセックスは出来な
わよね。春夏は彼のことをもつと知らな
きやいけないわ」
「フガ…ああ…フヒ、ブヒい…」
「うふふ、春のブタ声、パパのいびきと
そっくりよ」
「あ、ありがとう…ひやいまひゅう…」
「あッ！ ンゴおっ！ …ブヒイイフ！」

「は、はい…んごつ、ブフヒツ！」

「くひやい…つ！ パパあ…くしやいよ

お：パパの身体…ひんぼの…チンカし
ゆの二ほイがひゅるうつ！」

「ふふ、そうよ。全身が蒸れたキンタマ
のニオイなの。素敵でしょ？ いつか
春夏もこの身体に抱かれて、全身から同
じニオイを放つメスブタになるのよ」

「ああ…ああああ…つ！ はヒ…な…
なりまひゅつ！ ブヒつ、んほおつ！」

「は…い…つ！ わたしの…娘のブタ顔
が、鼻水がふりかかる。パパのニオイと
私のニオイが混ざっていく。
「ヒツ…み…見へええつ！」

春夏さんにクソ穴を犯され、部屋中
に三人の汚臭が満ちていく。それを吸
い込み吐き出し、喘ぎ、内臓までも満
たされていく。

「イキなさい、マゾブタ」

「は…い…つ！ イク…ブヒツ、ブヒツ！
いつ…グウううウウ…つ！」



一度メスブタ絶頂を迎えたあとは
もう自制が効かなかつた。
「パパ…ああ…パパあ…んつ、んちゅ
…キス…んちゅ、んちゅ…あ…臭
い…臭いの美味しい…つ」
舌を絡ませてフェラチオして、肛
門に鼻をうすめてねぶり、キンタマ
を口いっぱいに頬張る。そのたびに
私は射精した。
「もうすっかりパパの虜ね。こっちが
嫉妬しちゃうわ。んふ…葉、私もあ
なたの中、たっぷり汚してあげるつ
…んあつ！ あつ あああーーつ！」
ドロドロになつた肛門はチンポで
えぐられる度にブリブリと濡つた卑
猥な音を鳴らす。嗚呼、こんな恥ず
かしい音…パパに聞こえちゃう、目
が覚めてママとクソ穴セックスでイ
キまくつてる姿見られちやう…！
「パパあ…パパあつ！ 見て…見て
よお！ 私、イッてる…ママにチン
ポ洗腸されてイッてるの！ あつ！
あつ、また、イク…イク…ああ
…一つ！」

パパは起きない。包茎チンボの皮
の裏までねぶり回しても、パパのケ
ツ穴をほじくつても、安らかな寝息
をたてたまま、大量の黄ばんだキン
タマ汁を射精するだけで目覚める様
子は無い。まさか…
「それは腕御飯のカレーに盛ったクス
りが効いてるからよ」
「ガツカツしないで。これから段々と
量を減らしていくから」

射精後も休むことなく春夏さんは
私の肛門を愛してくれる。そして何
度も何度も精液を肉便器の穴に排泄
してくれる。度にブリブリと濡つた卑
猥な音を鳴らす。嗚呼、こんな恥ず
かしい音…パパに聞こえちゃう、目
が覚めてママとクソ穴セックスでイ
キまくつてる姿見られちやう…！
「パパあ…パパあつ！ 見て…見て
よお！ 私、イッてる…ママにチン
ポ洗腸されてイッてるの！ あつ！
あつ、また、イク…イク…ああ
…一つ！」

パパは起きない。包茎チンボの皮
の裏までねぶり回しても、パパのケ
ツ穴をほじくつても、安らかな寝息
をたてたまま、大量の黄ばんだキン
タマ汁を射精するだけで目覚める様
子は無い。まさか…
「それは腕御飯のカレーに盛ったクス
りが効いてるからよ」
「ガツカツしないで。これから段々と
量を減らしていくから」

一度メスブタ絶頂を迎えたあとは
もう自制が効かなかつた。
「パパ…ああ…パパあ…んつ、んちゅ
…キス…んちゅ、んちゅ…あ…臭
い…臭いの美味しい…つ」
舌を絡ませてフェラチオして、肛
門に鼻をうすめてねぶり、キンタマ
を口いっぱいに頬張る。そのたびに
私は射精した。
「もうすっかりパパの虜ね。こっちが
嫉妬しちゃうわ。んふ…葉、私もあ
なたの中、たっぷり汚してあげるつ
…んあつ！ あつ あああーーつ！」
ドロドロになつた肛門はチンポで
えぐられる度にブリブリと濡つた卑
猥な音を鳴らす。嗚呼、こんな恥ず
かしい音…パパに聞こえちゃう、目
が覚めてママとクソ穴セックスでイ
キまくつてる姿見られちやう…！
「パパあ…パパあつ！ 見て…見て
よお！ 私、イッてる…ママにチン
ポ洗腸されてイッてるの！ あつ！
あつ、また、イク…イク…ああ
…一つ！」



「滅らす……？ どういうことですか？」
「ふふ、この人、こんな気持ち悪い外見
してるけど性格は穢細なのよ。嬢がど
んなに可愛くて愛想な娘でも、いきな
りセックスはできないタイプなの」

「はあ……」

「だから、こうして毎晩少しずつ夢うつ
つの中で抱き合って犯しあって、慣ら
していくほうが早いのよ。堅苦しい親
子の挨拶からじや時間かかりすぎて嬢
だつて欲求不満になるでしょ」「それは……そうですね。その間ママと
自由にセックスできなーいし……」
「いつか、クリ無しで家族のセックス
が出来るよう、私たちも少しずつ慣
れていくましょ」

「はいっ」
嬉しい—— そ、うか、そ、うい、こと
だつたんだ。嗚呼、やつぱりママは素
敵な人だ。私、感激して涙が出そう。

「さあ、嬢。パパのニオイを味わつて
ばかりじやなくて、今後はパパにもあ
なたのニオイをぶちまけてあげて」
「え……あ、あのいいんですか……」
「ええ、それにお腹の中、私の精液と
ウンコがグチヨグチヨになつて我慢で
きないでしょ？ さあ、思い切り出して……そして思いつきりイキなさい」
「は……はい……パパ……出すね……いっぱい、
いっぱい喫いで、飲んで、食べて……つ
あつ、んああつ、あ……つ！」

「ブバアア、ブリュブリュブリュウ
ウッ！ ブババアアアツツ！」

「あつ、あああつ！ らめつイクつ！
パパに、パパに精液ウンチぶちまけて
……イフ……クラううう！」

「あああつ！ 嬢……見て、射精してて
わつ！ この人……あなたのニオイでチ
ンボイツてる……！」

春夏さんのおマジコに、大量の精液
が排泄されているのが分かる。私なん
かと比べにならない量と濃さ……す
ごい……あんなの、絶対妊娠しちゃう……」

「ああ…す…い、こんなに射精するなん…
フフ、この人、きっと僕のこと気に入つた
のね。夢の中でもさつと、僕のクソ穴に
顔を埋めて悦んでるんだわ。ちょっと姫唄
しちやうわね」

「もうママったら…それなら今後は交代し
ましょ？ 今度はママがパパの顔にブリブ
リひりだして、私がパパとセックスする」

「いいわよ。僕がキモブタチンボで孕まさ
れるとこ、全部見てあげる…」



「ふふ…ヒヒ…ヒヒ…たまきい…」
「え、えええつ！ バ…バ…起きたの？」
「…いや、寝言だわ ヒックリしたわね。本
当に夢の中で僕とセックスしてるわよ
「…なによお…わーっ パパたらホント
ムカつく…」

そんな私の癪など知らず、呑氣に
寝息を立てるパパを扶んで 春夏さんと私
はクスクスと笑いあつて、また愛しいチ
ンボに唇を寄せていつた。

「パパが、再び単身赴任に出かけるまでの
一週間、昼間は可愛い娘として甘えて、夜
は肉便器として春夏さんと一緒に「奉仕した。
「あむ…んう…パパのチンボ、昨日チンカス
舐めてあげたのに一日で…んなに…」
「ふか、たまらないでしょ。この臭くて汚ら
しい包茎チンボ…んぢゅ…ぢゅぶ…」
「結局、起きてくれなかつたけど…クスリの
量減らしたんですか？」
「減らしたんだけどね。クスリ以前にもども
と熟睡したらなかなか起きないタイプだから
「えーっ、今度つて…また数ヶ月空いちやう
んでしょ？ やだなあ…」
「仕方ないでしょ。それまでに、しつかり」
奉仕の練習しておきましよ」
「はあ…もう…パパのバカラ…純感つ！」
「ん…お…ヒヒ…んご…お…ヒヒイ…」
呑氣にキモブタなイビキをかいているパパ。
こっちの気も知らないで…ムカつくなあ。
「こんな醜感キモ男には…こうしてやるつ！」
パパの顔の上にお尻を乗せてグリグリ押し付
ける。パパ、これが私の二オイ。忘れないで。
次に帰ってきたときにはもつともつと濃くし
ておくからね。ああ、早くクスリ無しで互い
の名前を呼び合いたいながら家族みんなでセフク
したいなあ…。

若返った春夏々々が無理矢理夕々姉に
初えっちの相手をさせちゃう本。

This is "To Heart 2" fanbook Presented
by TANA @garyuh_chitai in 2010 Summer
for Adult Only...



成年向付
同人誌



夏の風物詩 暑氣樓。近づけば遠ざかり、追いかければ消えてしまふ幻影。
しかし、春夏さんと海へ遊びに行く朝、彼女を迎えて来た私は坂瀬の目前に現れた少女。否、彼女は私が近づけば近づくほど鮮明に届託ない笑顔をはじけさせた。

「たまきちゃん おはよー！」
「は……春夏さん？ な、なんですかそれ？」

「起きたら若返つてたの。だいじょぶ、初めてじゃないから。たまーにこういうことになるの。まあ一日で元に戻ると思うし、このまま遊びに行こう！」

「ええええええっ？」

「わ！ 若返った……？ にわかには信じられないけども、彼女の言動、仕草、雰囲気から直感的に悪戯ではなく本物だと分かった。いや、それだけではない。普段の春夏さんに感じるものとは別の魅力が私の胸を高ぶらせる。

ひまわりのような笑顔と楽しげに弾む声。甘い香り、ぶにぶにとした肌の感触……知り合った時には人妻であつたため決して見ることの出来なかつた姿がそこには、「ここに……目前に……胸の中に……股間に……あれ？」

「あははは……たまきちゃんのエッチ。」

「え？ ええっ？ わ、私……あ……？」

路上でチンポオナニーしちやつて――

「本日の信じられない光景第二弾。今度は幻だと疑う余地も無い。炎天下の路上で自身のペニスが射精していた。両手はペツトリと精液と恥垢に濡れていった。私は……彼女を見ながら無意識にズボンからベニスをとりだしオナニーしていたのだつた……。」「うそ……わ、私……あ……ああ……つ！」

「ダメ……チンポ……やだ、なんですか……あひつ！ また……イク……イクラつ！」

ドブツつ、ドブツ、ドブツうつ！ 手が止まらない。射精している姿を幼い恋人に満面の笑顔で見つめられて、私の身体は勝手に悦んでいた。しかし



思考は追いつかない。まるで催眠術でもかけられたかのよう…。「あー…さては…たまきちゃんって…ロ・リ・コ・ン?」

「あるはずがない、という説得力は皆無だった。止まらない射精。もは手を使わないでも無く、私は彼女の小悪魔的な職に射抜かれただけで絶頂していた。」「んふふ、たまきちゃん、そこに寝て」

「いや…ああ…」

言葉では拒否しつつも、へたり込む。普段の彼女には肉便器奴隸として服従しているので当然迎えなしが、今の彼女には別の意味で抗えなかつた。

「ほら、見える? つるつるの…処女」

「お…主…ん…」

「お…ああ…は、は、春夏さんの…し、処女膜…ああ…おまんこ…まんこおつ」

途方も無い歡喜だった。絶対に見ることが出来ないと諂めていた彼女の処女。

それが目の前に。顔の上に。

「んおおおつー! あおつ! おほおう

つ! いく…いぐうつ!」

「あははつ…ほら、お尻に穴も処女だよ。見て。喰いで。舐めて。幸せでしょ?」

「は、はいいい! ひ、ひあわへつ!

「あおお…処女マンコっ! うんこ穴ああ

あつ! おおつ! イ…イぐうつ!」

押し倒され、顔面騎乗されたまま、私は

ひたすらチンポをしごきアスフルト

の上に精液をぶちまけていた。

「見られてるよお? たまきちゃんが

みんな見られてるよ? うふふふ、恥ず

かしいよね? 通報されちゃうかもね?

やめちやおうか?」

「いや…いやああつ! やめないで…も

つと…もつと見せて! マンコ見たいつ

見たいつ! 見せてつ! お願いいつ!

「は…はい…認める…うつ! ロリコンで

すうつ! 私…処女マンコに興奮する姿

…ド変態チンボ奴隸れすううつ!」



「たまきちゃん 可愛いよ♪」「ああ…ありがとうございま…あひつ…あ…ああ…ああ…引つ張らな…い…んひつ…イク…チンボイくうつ！」
春夏さんの自宅前からここに来るまでの記憶はほとんど無い。ただひたすらチンボを丸出しにして電車に乗り、駅から歩き、浜辺で着替えながらずっと一人で射精し続けていた。もう何十回精液をぶちまけたか分からない。セツクスしよ？」「精液もったいないよ。セツクスしよ？」「だめ…それだけは…ああ…だめです…」「あ…あ…」
「も… やせ我慢しちゃって。もともと海でえっちな水着姿でセツクスして、みんなに見られるところ見てもらう予定だったでしょー」
「そ…それは…そうですけど…」
チラリと春夏さんを見る。まぶしく輝く彼女のビキニ姿に射精し終えたばかりのベニスがグンと反り返り血管を浮き立たせる。そう、ここに至るまで彼女は一切、私のチンボに触れていない。
（本当に…本当に私…どうしようもないロリコンなんだ…ああ…見られてる…女を見てるだけで射精するロリコン…見られてる…）
「ほらほら、いっぱい人が集まってきたよ。写真撮られるし、たまきちゃんのチンボ見てオナニーしてる人もいるよ」「ああ…ん…チンボ見られて…いやや…」「このままじゃ犯されちゃうね。たまきちゃんの目の前であたしも知らない男に処女を奪われちゃうんだ」「だつ…だめ！ そ、そんな…と…させないっ！ 春夏さんの処女は…わ…私…私が…ああ…」「え… でもたまきちゃんセツクスしてくれないじやない。こんなに精液ひりだしてるくせに。ホントは私がレイブされるところ見たいんでしょー？」
（違う…ああ…愛してるの…春夏さんを愛してます…だけ…分から…自分ですうつ！）

七つやくわ
七つやくわ



「んふふ、素直でよろしい♪ ジヤあ私が
教えてあげるね」
「え…つ？」

「たまきちゃんはね。この『じらし状態』
を愉しんでるの。初めてのエッチを自分
なんかがしていいのか…でも他の人には
させたくない、ってジレンマをね。処女
マンコにブチこむのは簡単だけど、その
前にたっぷり『おあすけ』されるのを愉
しんでいるマゾなの」

「あ…あ…そ…そんなん…」

「かなわない。

私はあまりの國星に浜辺にへたり込ん
でしまつた。そうだ…一度きりしかないん
処女喪失というシチュエーションを少し
でも長く味わうために、私は、無意識の
うちに私自身によつて調教されていた。
「変態だわ…ああ…そうです…私…自
分のことしか考えてない変態でした…あ
ああ…ごめんなさい…」めんなさいい
うつ…うう…つ

私はチンポを丸出しにしたまま泣きじ
やくつていた。まるで子供みたいに。
「いいのよ。たまきちゃん。それも私が愛
してるので優しさと愛能性缺なんだ
もの。こっちこそ泣かせてゴメンね」

「あ…つ」

春夏さんはそつと私の股間に顔を埋め、
勃起したままのペニスに小さな唇を被せ
ていた。

「ああああっ！」

「だ…だめ…あああっ！」
イク…舐めちや…あああ…汚れちやう
つ！ チンポ汁で汚れ…あああっ！ 飲
んじやダメええっ！」

「んくっ、んちゅうう…んじゅ…んつ、
んちゅ…ぶはあ…あは…お口の処女…

初めての口マンコ…あげちゃつた」

ドロドロのチンカス精液で可憐な唇を

光らせて春夏さんは優しく微笑んだ。あ

あ…今…この少女の初めてのフェラチオ

の相手は私になつた。私は大きな悦び

を手に入れ、そして大事なモノを失つた。

「んつ…んつ、んちゅ…美味しいよ…た

まきちゃんの精液…せーし…チンポお…

んちゅ…んく…欲しい…もつと…おまん

こに…ね？

ちょうどいい…チンポ入れて



「す…ぶ…つ
「そして…あは…大きくなつたら…およめ
さんになりたい…えへつ 入つちやつ
たよ、たまきちゃん」
「う…う…」

涙が止まらない。嬉しくて苦しくて気
持ちよくて切なくて。私はただ射精した。
小さく温かな胎内に止めども無く汚い
精液を排泄する背徳的な快感と、心を満
たす純粋な感激に全てをゆだねて。
「春夏さん…うああん…好きつ、好
きつ、ぐすつ…だ…大好き…つ！」

「…の妹になりたいな…そして…んつ…あ…」
「春夏さん…あつ…」

「い…た…つ」
ボトボトと柔らかな素肌から汗と涙が
ながれ落ち私を濡らす。カタカタ震える
細い身体 そうだ。怖いに決まつて
いる。かつて一度経験したもの、今は
身体も相手も違うのだから。

「春夏…さん…もし…」のまま…」
だけど私の口から出た言葉は、たつた
一つ残った理性の欠片が囁く無神な言葉。
「もし…このまま…身体が戻らなかつたら…」
どうするんですか…私、セックスして
：そのせいいで戻らなくなつたら、つて思
うと恐くて…だから…出来なかつた：」
じらしプレイで興奮していたのも事実
だけど、この小さな恐れも本物。
だけど、もう、遅い。いまさらこんな
こと言うのは卑怯だった。でも…春夏さ
んは挿入の途中で懸命に笑顔を作ってくれた。

「…そのときは…あはつ たまきちゃん
の妹になりたいな…そして…んつ…あ…」
「春夏さん…あつ…」

その声はいつもの意地悪な誘惑ではな
く、一人の少女の切なる願い。私にそれ
を拒否できる理由も、意思も、理性も残
ってはいなかつた。

「ん…く…うん…つ」
衆人環視の中、私の勃起チンポにまた
がるようにして、春夏さんが挿入を試み
ているのを、私は無言で見つめていた。
その健気な表情に心奪われ言葉を失つ
ていた。



ゆらり、ゆらり。
愛する人の小さな身体をしっかりと支えながらゆっくりと…彼に身を任せるようになれる。静かな、優しいセックス。今まで経験したことのない、周囲の人々の視線も気にならない。いや、むしろこんな素敵なおセックスを見せて付けずにはいられないほど誇らしかった。

「ああ…んあ…あつ…あつ…」
「まだ痛いですか？」春夏さん
「だ…大丈夫…。たまきちゃんのチンボ汁がぬちゅぬちゅして…気持ちいい…」
「嬉しい…あつ…ん…」そう言われるだけでも…あ…あは…また…出ちゃつた…
「うん…おまん…たまきちゃんのせ…」
えきでいっぽい…あつたかい…
「彼女の身体が震える。それは先ほどの緊張と恐怖がもたらしたものとは違う。セックスの快感に身体の芯からあふれ出した高ぶりだった。」
「春夏さん…んつ…」
「ん…うう…んつ…」

キス。

彼女にとつてはファーストキスということになるのだろう。私にとつても：自分からリードして口付けたのは初めてだった。その幸福感にまた射精する。

「ああ…たまきちゃん…ん…おまん…」
だけじやなくて…おしりも…して…おしゃりも初めてだから…あ…あ…たまきちゃんのチンボで…けつ生…んこにしてえ…つ

「はい。もちろんです。春夏さんの初めては全部：私がもらいますね。お尻の穴にもチンボ淫脣して…せーえきうんちをみんなの前でブリブリお漏らししながらイクところ…見せてください」
「ああ…ん…たまきちゃんもお…一緒に…あ…いっしょにお漏らしするのおつ！」
「ああ…いつもみたいにいっぽいいっぽいクソ穴からウンコしながらイクでえ！」

「あは…っ、一人並んで…クソ穴ブタマゾ命綱なら喜んでさせてもらいます」
「あは…はり私は彼女に尽くしたい。従いたい。彼女の下僕でありたい」
「そう心から…自分の氣づいて…私はまた特

「おはよう——櫻ちゃん」

「あ……おはよう……ございます。春夏さん……」

「あ……おはよう……ございます。春夏さん……」

「ふふ、夢じゃないわよ。ちやーんと海でセックスしたわ。私のおマンコもお尻も、背の中まで全部あなたのチンポでしつかりマーキングされちゃったわよ。素敵なロストバージンをありがとう」

「え、あつ……ど、どういたしまして……」

「帰りの電車で櫻ちゃんたらグッスリ寝ちゃって……他のお客様に手伝つてもらつてなんとか駅で降ろしてタクシーに乗せて……大変だったわよ」

「す……すみません……全然覚えてないです……」

「杞憂だった、というとか。処女を失おうがちゃんと一晩たてば元に戻るのだ。安心したというか……」

「小さな女の子に呆れられながら駅を運ばれる爆睡しているフタナリ女子高生……想像しただけでも顔から火が出そう……」

「ん？」

「つい俯いた視界に違和感……なにかおかしい。（足が……短い？）いや、下半身のサイズ自体が……あ……あああああ……つづつ！」

「チンポが無いッ！」

「あら、やつと気づいたみたいね♪」

「ま、まさか……まさか……」

「櫻ちゃんも若返つちやつたのよ。朝になつて私も気づいたんだけど……腰が抜けたほど驚いたわ」

「どどどどどーして……つづく？」

「さあ？　たまたま『来た』んじゃない？　私が初めて若返つたときもそれくらいの歳だつたし」

「たま……たま……？」

「口はバクバク動くのに言葉が出なかつた。昨日のセックスが影響しているのか、本当に偶然なのか、どうやら春夏さんにも分かっていない。ただ、彼女は自らの経験からまったく心配していないのは確かだつた。それどころか——」

「は、春夏さんつ、朝はん作りながら何チンポしぐいてるんですか？！」

「だつて、櫻ちゃんの処女を奪えると思うと興奮してきちゃつて。昨日、路上でいきなりセンズリはじめたロリコンさんと同じでしょ？」

「いや、そ、それはそうですが、私の処女なら以前、ちやんと掛けたじやないですか！」

「じゃあ私がまた若返つたとき処女を別の人에게てもいいの？」

「一回掛けたらもうあとはフリーだなんて寂しいじゃない。私は何度もだつて櫻ちゃんの初めてを務めさせてもらいたいんだけど……ダメ？」

「だつ……ダメな訳ないですよっ！」でも、その……もう少し……そう！『じらしプレイ』みたいなドキドキ感を愉しむ感覚とか無いんですか？昨日の私みたいに……『私が櫻ちゃんの処女を奪つていいのかしら？』みたいに！」

「まつたくないわね。モタモタしてたら他の男に襲わ

れるかもしれないし、朝ごはん……だつて冷めちゃうわ」

おそらくは元に戻る明日の朝まで延々と射精しまくるつもりなのだろう。よく見れば朝食のメニューはこれでもかというほどの肉類とニンニクが山盛りのスタミナちゃんご飯だった。

『さて、じやあますはおはようの挨拶代わりに一回しましようか♪』こら、逃げないの。大きかろうが小さかろうが、あなたは私の肉便器奴隸なんだからアツサリいわれるとロマンチックさの欠片も無い。いつたい昨日の自分が散々戸惑い、葛藤し、乗り越えてこの手に掴んだ愛とはなんだつたのか……といふかあの可憐な少女が春夏さんの期そのままだうことか。

『さて、いたたきます♪』

『あひいい……っ……』

そして私は……結局、彼女にとつて一番の獲物であることに変わりは無く、いつもどおり子宮の奥まで犯され、肛門から精液流瀉を逆流させながら初めてのセックスにより狂うのだった……。

（了）



ゴランノアリサマ

This is "Goran-no-Arisama © traholtshello-aID" fanbook
Presented by TAKA (aryuh-chitai) in 2021 winter
for ADR-Billy...

成年向け同人誌

ただいま、秋俊

秋俊の持つ部屋に帰ってきたアイ。戦いの後だというのに、彼女の服には返り血の一つもついていない。

「豪勝だったの？」

うん。メグ姉さまとリンも居合わせたし、今日のゆらぎも、まだ弱いヤツだったから」
「ホントに？」服の下、身体の中はあいつらの精神でグチャグチャなんじやないの？」

「そんなこと……ない……んつ……秋俊……あ……少し意地悪く秋俊が囁き、キスをする。
「秋俊……あきと……しい……もつと……キス……んつ」

一人の唾液が垂れ落ち、魔法戦士の衣装が

汚れていく。

そして触手——一ヶ月ほど前までは人間の指であつたはずのソレがアイの身体を愛撫する。あつという間にアイの全身はこの異形となつた老人が分泌する粘液で覆われていく。

「オレが一緒に戦えればいいんだけど」「あ……ん……いいの……私は負けないから……だから……秋俊はここにいて……ずっとここに……」

もう、あんな思いはしたくない。シンたちとの戦いで巻き添えになつた秋俊は重傷を負つて動くことが出来なくなつて、アイはそんな彼と同居し、戦闘的に支えたものの、肉体的にも精神的にも崩壊寸前だつた秋俊は、いつしか死を願うようになつた。「ダメ……できない……できないよ……」生きていで欲しい。たとえどんな姿になつても、秋俊を守る。彼という存在を守る。そのためならば、なんでも受け入れる。

そして、秋俊は崩れた。ゆらぎとなつた身體でようやく人間の苦しみから逃げ出しができた。できてしまつた。それは、アイにとって喜びだつた。

彼が生きている。アイを求めて、愛してくれ。それだけが嬉しい。だからこの剥離的な日々を守るために戦う。人からも、ゆらぎからも、魔法戦士からも、死なせない。死にたいなんて思わせない。もう、秋俊がいないと、自分も生きていけないんだから……。

「オレがないと？ オレのチンポがないと、の間違いじゃないの？」
「あ……ん……ああ……ちがう……よお……チンポ……じやないの……あつ……ああ……あつ……チンポ……ヒンボ……お……つ……あつ……ん……ああ……もつと……チンポおつ……ほらほら……ちよつと子宮にぶちこまれただけでイキまくつてるじゃないか。どーせ、ゆらぎたちにも、犯されまくつたんだろ？」
「あ……ああ……うん……ホントは……犯された……おつきくて汚いチンポで……マンコもケツ穴も犯されたよ……ああ、んああつ！」
アイはよがりながら、ウソをついた。以前の固い性格だつた自分が出来なかつた、悲しみを覚え始めている。自分自身はこういう遊びを覚えていた。それもまた悦びだつた。



「そつか、やつぱり浮氣してたんだ」
「ああ…ごめん…秋俊…チ…ン…ボ…ゆらぎのチ…ン…ボ…がす…んくて…ん…あ…あ…ん…！」
「あっ…秋俊…射精…してる…っ！」

「おつと、こ…めん。アイが他の男に、いや、得体の知らないバケモノにレイプされるところ想像して…イ…ツ…ち…や…つ…た…よ」

「ああ…ひ…ど…い…あ…あ…」

「ひ…ど…い…は…は…ど…一…セ…ソ…イ…ツ…に…も…射…精…さ…れ…た…ん…だ…ろ…？…ど…う…だ…つ…？…オ…レ…の…チ…ン…ボ…上…り…大…き…く…て…臭…く…て…氣…持…よ…か…つ…？」

「言葉責めに、アイは興奮する」
「うん…大…き…か…つ…た…臭…か…つ…た…あ…つ…！」
「チ…ン…カ…ス…が…ベ…フ…ト…リ…つ…いた…チ…ン…ボ…で…犯…さ…れ…て…」

レイプされて…イ…ツ…た…の…！…秋俊より…
秋俊のチ…ン…ボ…より…氣…持…ち…よ…く…て…ん…ひ…あ…
あ…あ…つ…！…メ…グ…姉…さ…ま…に…助…け…ら…れ…なか…つ…た…
ら…ひ…つ…あ…あ…つ…！…あ…の…主…ま…自…分…か…ら…
肉…奴…隸…にな…つ…て…ん…あ…あ…！…あ…あ…！」

ド…ボ…ッ…！…ド…ブ…ブ…ブ…！…ド…ボ…ボ…オ…オ…！…
秋俊のベニスがバケツをひっくり返したよう…
な量の精液を、アイの胎内に吐き出す。

「ら…め…ら…め…え…なん…なん…れ…射…精…する…の…！…
わ…た…ヒ…犯…さ…れ…た…の…に…浮…氣…した…の…に…い…つ…！」

「あ…つ…あ…あ…つ…！…あ…あ…！」

「ク…ク…ご…め…ん…」また出しちゃった。
恋人を犯されて興奮してると、最低だよ

ね？ 嫌いになっちゃつた？」

「な…ら…ない…よ…お…つ…！…好…き…好…き…秋俊大…好…き…

つ…！」出して…チ…ン…ボ…汁…出…して…え…つ…！…も…つ…
と犯…さ…れ…る…から…つ…！…他…の…や…つ…の…チ…ン…ボ…し…や…

ぶ…つ…て…肉…便…器…に…な…れ…る…から…つ…！」

それ…言…葉…遊…び…の…ブ…レ…イ…シ…ダ…メ…だ…よ…？…淫…乱…で…チ…ン…ボ…中…毒…に…な…つ…た…公…衆…便…所…；…世…界…で…

た…つ…た…一…人…の…オ…レ…だ…け…の…淫…魔…法…戰…士…；…そ…ん…女…の…子…に…な…れ…る…？」

「う…ん…う…ん…！」なるよ…淫…光…に…なる…よ…お…

い…ば…い…浮…氣…して…マ…ン…コ…に…出…して…も…ら…つ…て…；…

他…の…赤…ち…や…ん…；…妊…娠…する…か…ら…あ…！…だ…か…

ら…だ…ら…も…つ…と…射…精…して…え…つ…！…私…の…こと…

；…好…き…に…な…つ…て…；…あ…つ…；…あ…あ…つ…！」

アイの淫…光…宣…言…に、秋俊の被…虐…と…加…虐…、そ…し…

て…自…虐…の…喜…悦…は…絶…頭…に…達…し…た…！…完…全…に…崩…れ…た…身…

体…は…本…能…の…ま…ま…に…愛…す…る…女…の…胎…内…へ…潜…り…こん…で…

いく…

「あ…ぎ…つ…；…ん…ぎ…や…あ…あ…あ…つ…！…秋…；…あ…ぎ…ど…ビ…

イ…つ…！…あ…は…つ…！…あ…は…つ…；…イ…ク…；…あ…ギ…と…

ヒ…あ…あ…あ…あ…つ…！…あ…ぎ…い…あ…あ…！」

紅…門…から…も…入…つ…て…くる…秋…俊…も…は…や…人…では…な…

い…。…しか…し…、彼…の…思…考…は…あ…の…時…と…同…じ…よ…う…に…自…

分…の…中…に…ハ…ッ…キ…り…と…聞…こ…え…て…くる…。

「アイ…の…子…宮…；…ヶ…ツ…穴…；…綺…麗…だ…よ…。…温…か…く…て…、

柔…ら…か…く…て…、す…ご…く…氣…持…ち…い…。…嗚…呼…、

こ…れ…が…他…の…男…に…汚…さ…れ…る…ん…だ…ね…！」

「そ…う…ら…よ…；…見…て…え…。…マ…ン…コ…も…；…う…ん…ち…の…穴…も…；…

よく…見…て…え…。…そ…こ…；…キ…ミ…の…た…め…に…；…チ…ン…ボ…

で…汚…し…て…くる…から…；…だ…から…！」

「だ…か…ら…！」

「秋…俊…は…；…浮…氣…し…ち…や…；…ら…め…え…！」

「もし…し…たら…！」

「殺…す…よ…；…絶…対…；…殺…す…か…ら…；…あ…あ…ん…つ…！」

そ…の…言…葉…に…、秋…俊…が…再…び…射…精…す…る…と…、アイ…も…

ま…た…全…身…を…震…わ…せ…、こ…の…修…い…幸…福…に…狂…喜…し…た…」



「やらぎと暮らしているのはアイだけではな
かった。リンもまた、下水道で戦い、一度は
敗れたやらぎと同居していた。
あああ……あ、アンタ……どんだけ……た、溜め
てんのよ……お、おほお……お腹……破れ……
あへええつ！」

「リン様が毎日たくさんウンコを出してくださ
りますから、張り切ってみました」

「バカ……あああ……別に好きでアンタにウ
ンコ食べさせてるんじゃないんだからあ……
あああ……もう……もう……だめ……出させて……
出させてえつ！」

「ダメです。いつもの通り高飛車に！」
「く……この変態！ ブタ！ あ、あたしの
……く、くっさいウンコ……た、食べなさいよ……
……あ、あんたは便器……ふふ、あ、あたし
のつ、あたしだけの便器なんだから……つ！
あつ……ああつ……出る……出るううつ！
ブリブリブリブリック！ ブボボッ！ ピブ
ブウツ！ ブリューブブッ！
「ひきいいつ あつ、あはつ……イク……イぐ……
あ、あたヒ……うん……れイタウううつ……
やらぎの媚薬浣腸によつて妊娠のよう。脚
ら生された腹から大量の汚物をひり出す。

「あああああ……うん……氣持ひいい……
リンは捕らえられた下水道で二ヶ月以上も
この行為を強要された。肛門を犯される快
感。脱糞の開放感。強烈な羞恥を感じながら
も、忠実な下僕を征服し、逆に調教されると
いう異常な環境。

外界の情報や刺激がない地下では、思考も
肉体も唯一自分に触れてくる存在に全てを向
けざるを得ない。快樂も屈服も嫌悪も哀願も
言葉もえき声も呼吸さえも、五感の全てが
いつしか、このやらぎのため擰げられていた。

「リンさま……今日も素晴らしい味でした」
な、何言つてんのよ……まだ……あ、あたしは
満足してないんだからね……いつもの三
しないよ……早く……早く……あつ、んがああ
つ！ き……きた……あは……うん……アタシの……
ウンチきたあ……」

やらぎの中から、先ほどひり出した己の大
便が逆流してくる。リンの全身がガクガクと
わななき、思考が吹っ飛んだ。アハ、アハは
ひやええええつ！ あへ、アハ、アハは
はヒヘ……ああああつ！」

そして再び脱糞。リンはこの快樂の虜だつ
た。肉体だけではなく精神も真っ白になる。
苦しみも不安も悩みも全て薦使となつて消え
ていく。

「……うあ……リンちゃん、大丈夫？」
「うん。ついさっき来ただけど……下水さん、
すいぶんと大きくなつたね……」
「フン、ただの食べすぎよ。もう手足は退化し
てるから完全に獣物ね。あのキモ面が街を歩
かなくなつただけでも、いいことだわ」

「もう…リンちゃんたら、相変わらず素直じゃないな…いいっぱい食べさせてあげてるのは…」
「…りんちゃん自分じやない」

真っ赤になつて顔をそらすリンに苦笑する美景。彼女は地下から出てきたリンたちにマジックの部屋を手配してくれた張本人だった。当然二人の関係は知つている。

リンはアイの場合と少々事情が異なる。「愛する者を守る」という想いは皆無で、單純に、下水ゆらぎと同棲していることがバレて欲しくないだけだった。ゆえに、ゆらぎは徹底的に殺し人間は寄せ付けず、他の魔法戦士には異変を悟られないよう平靜を装いつつ迅速に仕事をこなして帰宅する。余計な会話は無し。美女以外の全存在 ブラッドの高い彼女には、美女以外の全存在にこの生活を知られるわけにはいかないのだ。

「…で、用意できたんだ」

リンの意地悪な笑みは赤面して小さく頷いた。その視線の先にはぼっこり膨らんだ腹。「あの…ホントにリンちゃんがしてくれるの？」
「当然でしょ。あんな汚いデブにあなたの終焉なお尻、触れさせられないっての」
リンに促され、美女は服を脱いでいく。膨らんだ下腹部がギュルルと小さく鳴った。
「いいよ。出して…美女…あ…む…んつ」

背後のリンが美女の尻肉に顔を埋め、肛門に舌をもぐらせ脱糞を催促する。

「…あ…ホントに…ホントに…出ちやう…」

たびたびこの部屋を訪れていた美女は、今日ののような光景を何度も見ていた。そして、その

たびに胸を熱くしていたのだった。そして、その

（私も…あんなふうにいっぱいウンチ…吸われてみたい…イク…みたいな…）

ところが、一週間前に意を決して相談したと

ころ、下水ゆらぎは「お断りします。私はリン様専用ですので」と聞斐いれず拒否した。

（じやあ、あたしが美女の便器になる）

「え…そ、そんな」

リンは下水ゆらぎをボコ殴りにした手でそつと美女の手をとり、優しく見つめた。

あたしが捕まつてイモシガ女にやられたとき、美女が身体を綺麗にしてくれたでしょ。あの時あんたのこと…ホントに好きになつたの。

だから、あたし…美女を綺麗にしてあげたい

（え…そ、そんな）

「あつ…ああ…出てる…リンちゃんつ…」

かけてる…食べてもらつてる…」

（んつ…んぐ…んぢゅるうつ…）

（あああ…私…うんぢして…リンちゃんに…）

（かけてる…食べてもらつてる…）

（あああ…私…うんぢして…）

（あああ…私…わたくし…気持ちいい…）

（…）

（ああ…イク…イク…あああ…）

（美女…あは…すごかつたねえ）

（言わないで…リンちゃん…んつ…んぢゅ…）

（あの時のようく美女はリンの顔に唇を寄せ…）

（…汚れを拭い取つていく。）

（…）

（…）

（…）

うん、何年後でも何十年後でも、未来を見つめて暮らせるなら、それが一番素敵だと思うな。よろしく美景、これからはリンって呼んで、こちらこそよろしく、リン、んつ、愛に満ちた瞳と汚物に濡れた唇が重なり合、二人が強く抱きしめあつた。その時、私はどーなるんでしょうか……」「いやクソデブ！」

美しい様以外のゆらぎを殺すということは……空気読みなさいよ！」「私が強く抱きしめあつた。あのリン様、ちょっとといいでしようか……」「どうして……そりやまあ……」

リストラされた彼がバラされて下水に帰ってくるのは、この二日後のことである。

薄暗い礼拝堂の中に、固い靴音と淫猥な液体の音、そして本を読む女の声が響いていた。

以上のように、ゆらぎとは、下等でおぞましく、大変危険な存在なのです。自分を強く持つて、このような下劣な薬に……

もつとも近い迷える子羊たち。ゆらぎに朗読しているのは、最強の魔法戦士メグ。それを刷り込まれてきた。

そう、ゆらぎには、決して心を許してはいけない。肉体も許してはいけない。もし、ゆらぎに成ってしまつたのなら、たとえそれが魔戦士であつても、存在を許してはいけない。

「あの子のようにならぬ」と、彼らの与える：快楽は、並みの精神力では

「ゆらぎは……あ……あ……あらゆる手を使つてこちらを堕としにきます……憤団、攻撃、策略、そして特に……か……快楽……うあああ……あっ、チンボ……チンボイクううう！」

魔戦士であつても、存在を許してはいけない。

「あははは、メグねーさま……どう？ 自分の手

で人間たちをもつとも下劣な存在とやらにしちやつた気分は……

「ま……マユ……こんな……ひどい……」

その様を見て、マヌに恨みがましい視線

を送る。その瞳にはここへ連れてこられた当初の力強さは無かつた。

メグはシンに敗れた後、消息不明になつていたものの、しばらくして自力で脱出したことを送る。しかし、実態はまだ彼らの監視に逃れ、命令どおりに動かされているだけの、所謂、軟禁状態と言えた。

「ひどい？ 私たちは迷える人間を救つてあげるために、ここへ連れてきて誇り高き最強の魔戦士に説法をお願いしてるだけだよ？」

返す言葉が無い。確かにここにいる老若男女、みな事情は違うど心に穴が開いて、救い



造を欲していたのだ。たとえこの身が淫猥な改造をされているとはいって、淫歌に負けて彼らをケダモノの世界に陥落としたのは自分だということは、痛いほど分かつていた。

「ほら、ボーッとしてると犯されちゃうよ？」

数十体の異形が、メグに向かってのそのそと近づいてくる。ベニスを勃たせ、よだれを垂らし、触手をうねらせて、目の前の聖女を犯し、その仮面を引っ張り出さために。

「殺さないの？ あたしのときみたいに」

メグは動かない。動けない。そしてとうとう、元・人間たちに押し倒された。

「サイテーねー」
「ブタ」

それが合図かのように、メグは身体中の穴に性欲をねじこまれる。そして、メグは身体だけではなく、心まで抵抗するのをやめた。

「あーああー、んあー」
「チンポーああー」

入れて……メグの……この最低のブタ女のマンコ……あなたたちのチンポが欲しい……欲しいの、よおーっ、あーきたーんああー、もつと、まだ入る……入るから……んぎいいー！」
「そー上、ケツ穴も……魔法戦士のウンコ穴もグチャグチャに犯して……犯してええつ！」

「あひーいいっ！」や、ああ、わたひー射精吹き切るかのよう絶叫する。男のゆらぎは改造されたメグの乳首にまで挿入し、女のゆらぎは、メグのペニスをしゃぶる、自らの中に入りし、精液を搾り取る。

「あひーいいっ！」や、ああ、わたひー射精している……ゆらぎに射精つ、魔法戦士……なのに、バケモノを孕ませちゃううう！」

「いいよねー」魔法戦士つて。こんな露骨なセクシースでくるんだもの。人間じや死んじやうし、あたしみたいな弱っちいのじや、ゆらぎになつちやうもんね。ねえ、おねーさまが強いい魔法戦士になつた理由つて、ゆらぎといっぱいおマンコしたかったからでしょ？」

「そうよー、そうよーおーいつぱい犯してくれるからー強くなればなるほどーすつごいおチンボーチンボでグチヨグチヨ犯してくれるんだんものつ！」

「あはー、あはー、あはー、そうよー、そうだつたんだー、アハハハハー！」

白目をむいて絶頂しつつ、メグはケタケタと笑い、泣いた。それでも、彼女自身はゆらぎに堕ちない。堕とさせてくれない。死ぬまで魔法戦士。死ぬまで肉便器。

「あはーはー、ちようだいーせーえきー口に……顔にかけて、ぶつかけてー！」あはーああー、美味しいーチンポ最高ー大好きーいつー！」

雨が降っていた。

雨音以外聞こえない冷たい礼拝堂の床に、自瀧液と汚物にまみれ、それらを肉片と返り血で塗り隠した全裸のメグが横たわっている。

眼つてはいない。死んでもいい。ただ、果然と天井を見詰めていた。

「……」

雨音に、無聲な足音。

「やれやれ、この有様はなんだ」

「ご覧のとおりよ」

シンの抑揚の無い声に、マユがぶつきらぼうに返した。メグはのろのろと身体を起こす。シンもまた、いつもの光景に特別な感情は抱いていないようだった。

「全部か？」

「三四逃げたわ。まあ、すぐにそこの責任感

の強い魔法戦士さんが追いかけるでしょう

けど。そうよね？」

メグは答えない代わりに、血に染まつたロードを握った。三四を除いた数十のゆらぎを肉片にした凶器。かつてマユの胸を貰った最強の武器。

「狩りなさい」

腰辱の宴の中、マユはこのロードで一匹のゆらぎを切り倒し、狂気に隨じようとしていたメグを無理矢理、現実に引き戻した。

「冷たい雨で命ずる。ようやく魔法戦士の

捕から連れられる。そんな期待を打ち砕く仕打ちに、メグは声を上げることもできず泣き、操り人形の様に力なく刀を振るつた。生まれたばかりのゆらぎは、ほとんどが肉片と化した。

「何よ。いつもやつてることじやない。もう慣れたでしょ。私の時はぜーんぜん躊躇しなかったクセに今さら傷ついた顔しても説得力ないっての」

定期的にメグを苦しめるため、過去にしばりしつけるために行われる。メグは快樂と苦惱無

い新築から逃げられるわけもなく、次々と

自分が何者になつたか理解できない。自分

の新しい身体の動かし方もよく知らない赤子だった。そんな者達だから、当然メグの無気力な斬撃から逃げられるゆらぎは、ほとんどが

死んで生きられない身体になつていた。

「……邪魔」

出口に立っているシンの前で、ようやくメグは口を開く。マユからは後姿しか見えなかつた。いつもの背中。いつも懐れて、いつも

追いかけて、そして決して振り向いてくれなかつた懐れの背中。

さつと、今、お姉さまは笑つている。

自虐的で無気力に、兄に向かって侮蔑の笑みを向けているに違いない。こんなに侮辱して、こんなに苦しめている自分には、何も無い。いつもいつも、私は——。

「逃げたやつを殺しにいくのか。身体を残つてから行け。そのママじや、ゆらぎと間違えられてあの一人に殺されるぞ」

「余計なお世話よ。それに、雨が降つてゐるほど」

「他の二人はここ周辺のゆらぎをメグが生み出しているとは、夢にも思つていいだろうな

まあ、二人とも、そんなことを気にするよう

な状況でもない様だがな……」

アイとリンがゆらぎを愛し、ゆらぎを狩りゆらぎと共に生きていることをシンたちは知りつてゐる。シンにとって、それは愛憎を超えた。鍊金術師ならではの好奇心で見守りたい生態であると言えた。無論、メグもまたその思

考はされた。魔女たちは、魔法戦士とゆらぎの関係に、新しい境地を見つけ出そうとしている。それ

ぞれのスタンスは異なるが、決して彼女らは

「やらいでない」

「なんだつたんだろ。あたし

不意にマユがつぶやく。

「あたしだけ、弱かったのかなあ：メグ姉さまは結局、ゆらぎになつても振り向いてくれないし……」

もう、あの二人と同じ魔法戦士には戻れない。もしかして、もう少し自分が、強かつた

戦つて、笑つたり、けんかしたり泣いたり……

きつとこんなに寂しくなかつた。

「……どこへ行くんだ？」

「別に……散歩するだけ」

胸が痛い。マユは傷一つ無い胸元を無意識に押さえていた。痛みの理由は分かつてゐる。

誰にも言えない。言える人なんかいない

。「わたし：感動してる……」

なんという有様。

マユの小さな唇から漏れた重いため息を、

あの日と同じ冷たい雨が、かき消していく。

（了）

彼女たちは、魔法戦士とゆらぎの関係に、新しい境地を見つけ出そうとしている。それぞれのスタンスは異なるが、決して彼女らは

「やらいでない」

「なんだつたんだろ。あたし

不意にマユがつぶやく。

「あたしだけ、弱かったのかなあ：メグ姉さまは結局、ゆらぎになつても振り向いてくれないし……」

もう、あの二人と同じ魔法戦士には戻れない。もしかして、もう少し自分が、強かつた

戦つて、笑つたり、けんかしたり泣いたり……

きつとこんなに寂しくなかつた。

「……どこへ行くんだ？」

「別に……散歩するだけ」

胸が痛い。マユは傷一つ無い胸元を無意識に押さえていた。痛みの理由は分かつてゐる。

誰にも言えない。言える人なんかいない

。「わたし：感動してる……」

なんという有様。

マユの小さな唇から漏れた重いため息を、

あの日と同じ冷たい雨が、かき消していく。

（了）

女教師美景と魔法少女リンが 夏休みの自由研究を手伝ってあげる本。

This is "mahoushoujo-ai2" fanbook Presented by TANA @garyuh-chiba in 2009 summer for Adult Only...



成年向け同人誌

「みかげせんせー」できましたー
「あはやいねーちゃん」と見直ししたかなー?
「やつたー!」
弾けるようなく微笑む。
彼女はシンとの戦いの後、秘書の仕事を辞め、今はこのマンションの一室で学習塾を開いている。塾が広まり今では十数人が集まるようになっていた。
無料で分かりやすい上、自らが親の期待に押しつぶされそうになつた経験や学校生活で経験した寂しさを交えて話をするので、いから思春期の少年少女、果てはその親までが彼女を慕つていた。

(『まやちゃんに感謝しなきやね』
本来ならゆらぎである自分を抹殺する立場でありながら、親友のように時に恋人のようと共に暮らしているリン。
彼女の脇詫の無さ、オープンな明るい性格が愛いに満たされていた美景の心を少しずつ前向きにしていった。それは、かつて心引かれていた秋波には無いものだった。
(『まやちゃん』)

「みかげせんせー」できましたー
「あはやいねーちゃん」と見直ししたかなー?
「やつたー!」
弾けるようなく微笑む。

今、彼もまた魔法戦士であるアイと共に暮らしている。美景は失恋した痛みを忘れようとしているが、彼を想うと未だ心がゆらぐ。
「せんせー! 美景せんせー」「あー、めんなさい。ちょっとほんやりしゃやつた」
「またエラチナ?」と考えてたでしょー♪
「ち、違うよつそんなこと...」
「触手でてるよー♪」
「あ...や、やだ...もう...」
触手だけではなく股間からはペニスが隆々と勃起していた。たちには見慣れた美景の姿だが、本人だけは慣れていない。顔から火が出るほど赤面している。先生の姿にも父兄も微笑んでいた。そのたくさんの笑みは失敗を恐れ、失望と嘲笑に怯えていた学生時代には得られなかつた彼女の財産だ。

(『まやちゃんに感謝しなきやね』
彼女の脇詫の無さ、オープンな明るい性格が愛いに満たされていた美景の心を少しずつ前向きにしていった。それは、かつて心引かれていた秋波には無いものだった。
(『まやちゃん』)

「お、今日もまた勃起してるわねー」
「あ、リンちゃん。おかえりなさい」
「おかえりなさい、リンさま」
リン様は満足そうに頷いた。



そもそもはリンが近所のたちの花の種を持ったわ。

リンが小さな種子を取り出す。それは魔法戦士の世界にだけ存在する植物の種。本当に持ち出して大丈夫だったのか? 本當に持つたかだけなのだが。

「へーきへーき。不純な目的のためにやないからねー♪」
ホントだろうか? なんか勝手に持ち出された雰囲気がブンブンする。が美景は口に出さなかつた。確かに不純な目的ではない。たちの夏休みの宿題を手伝うという名目だった。

「自由研究? あー、それならアタシたちもやつたわ」
きっかけは、夏休みにアサガオの観察日記をつけるという話題だった。アサガオの観察 자체は問題ないのだが、毎年毎年同じものを記録していくも面白くない。違うテーマに取り組んだほうがモチベーションが上がるのではないか? という話をして、いた時にリンが割り込んできたのだ。

「リンちゃんも...アサガオを?」「いや、アサガオじゃないけど似てるヤツ。魔法戦士の学校で一年目に義務付けられるんだよね。けつこう面白いよ」

「へえ...見てみたいなー」「見るっていうか...やつてみる? コツチの世界でも栽培する環境は用意できるはずだし。種も珍しいものじやないからアツチに戻ればすぐに手に入るよ」

「わあ! やつてみたい!」
美景は塾のたちに負けないほど明るい声を出して瞳を輝かせていた。それにはここ数年、否、十数年忘れていた純な喜びが。
「リンちゃん、あの...コレは...」「コレって、栽培のための...エサ...よ。で、ココに種をズボン...と」「や、やめろっ! やめて、あああ! リン、それ...うあ...あがあつ! エサ...として捕獲されてきたのは...アイだった。」



「うあー アイー!! アイー!!」
そしてもう一人。肛門に種を突っ込まれて悶絶
しているアイに向けて泣きじやくつていい男。
「岡島くん…」

美景が恋した男。しかし今は美景など眼中に無
く、恋人が誰の苦痛に苦まれているのをただ泣き
ながら見ている。

美景が恋した男。しかし今は美景など眼中に無
く、恋人が誰の苦痛に苦まれているのをただ泣き
ながら見ている。
「あなた細い絆で両手を縛られているだけなのに、
あん手切つて助けようともしない。それどころか
裸に剥かれてベニスを丸出しにしてる。それでも魔法戦士の恋
引き千切つて助けようともしない。それどころか

みつともないわねー秋街。それでも魔法戦士の恋

人なの? ほらほらアンタのチンポ。 たちが
見てるわよ。観察されてるわよ」

たちは、その言葉どおり苦痛に尻を眺ね上
げているアイと泣きじやくる秋街をスケッチして

いる。父兄はしつかりビデオまで回していた。
「うー、やめろー、やめてくれー!! なんで…

なんでこんなことするんだよー」

「夏休みの宿題なのよ。ね? 美景」

う、うん…めんね。 岡島君」

反射的にそう答えていた自分に、美景は驚いた。
なぜ助けないか。なぜ止めさせないのか。なぜ、
惨めな彼の姿にこんなに興奮しているのか。

「あの種はね、魔力を持った者に寄生する植物型
のゆらぎなのよ。魔法戦士の一年生はますあのレ
ベルのゆらぎを観察することで、その生態を少し
ずつ理解する。いきなりデカイのと戯うことな
んか出来ないでしょ?」

「じゃあ、あっちの世界でもエサに…」
なぜ助けないか。なぜ止めさせないのか。
「そうよ、重傷を負つたりして使い物にならなくな
った魔法戦士を実験台にね。アイもメグもアタシ
も、みんなこういう実習をしてきたのよ」

「ゆらぎを理解すると同時に、負ければ魔法戦士と
はいえ、こんな目に遭うということ。そして完全
に寄生されてしまえば、ゆらぎとして同僚に処分
されるということ…そういう基礎教育のためにね」

リンはサラリと言ふと、大きく股を開き、毎日
のセククスですっかり拘強された肛門を見せつけ
て、美景を誘う。溢れ出る大量の糞便が部屋を熱
氣と共に満たしていく。

「だから、アタシが殺されそうになったら…譲って

ね…美景」

「リンちゃん…」
いつも譲つてもらっているのは私なのに。リン
の、いじらしい言葉に胸が熱くなる。ベニスが膨ら
み、身体中から触手が溢れ出る。
「来て…クソ穴もおマンコも…みんなに見られな
がら…犯して…あ…あああ…んあああ…」

ブヂュウ、ブヂュウ、ブヂュウ、グヂュウ！

「リ...リ...ああ...」

「中...中...リ...ちゃんの...お腹の...中...つ...」

「ああ...」



(あ...) もしかして...)

ある考へがひらめき、思わず声を出そうとした。美景の唇を、リンが指先でそっと制した。

「生だ」たちが考へてゐるのに先生が答へ教えちゃダメじやない

「あ...」、「めんないさい」

見えてみると、私も父兄も秋俊の存在意義に肩を擡めていた。

この觀察が早く終わりすぎるので防ぐため、だなんてみんな気づくかな?」

美景の考へは正解だった。リンは初めからある程度、発芽が急速になることは予想していた。それはすなわち、エサであるアイが強力な快樂に屈して壊れてしまうこと、魔力を吸い付くされてしまうことに繋がる。だから――

だから、彼女の氣力を無ぎとめるための保護として、間島君を...)。

アイの肛門の中には根を張り内側から内臓を犯し、飛び出た外側から性器や口、鼻や耳の中まで犯しているゆらぎ。美景にはその因縁ともいえる快楽が理解できた。

それゆえに、秋俊を呼び続けることでなんとか耐えているアイにとって彼がどれだけ大きな存在なののかが伝わってきた。これなら、たちの自由研究として夏休みの間、持つてくれるだろう。美景はリンの心遣いに感謝した。

（あ...) もしかして...)

共観察の結果、これ以上吸うと、エサが枯渇して共倒れになると判断したようだ。その後、花の中央に繁殖用の種を作り始めていた。

それ秋俊も相変わらず半死状態で倒われている。

それでもアイは時折彼の名前を呼んでいる。驚くべきで紳だった。

二人の愛と醜態を見せ付けられ、完全に秋俊への執着が無くなつた美景は、リンとたちの愛情を迷い無く受け入れていた。否、自ら貢つていたと言つても過言では無い。

私も、みんなにとつての姉になりたい。みんなが苦しんでる時に私の名前を呼ぶだけで支えになれるような存在になれる――

「リンちゃん... リンちゃん... ああ... あむ、んちゅ... あんぐ... あむちゅううつ... あはあ... あん」

「美景... ああ... お尻... ああんソレ好きい」

「うん... 嘰つて、ウンチ吸つてえ... あ... 好き」

「美景... 大好きい... うつ!」

「先生え... リンさま... あ... あつ... あつああつ!」

肛門をしゃぶる私に、たちが射精する。

夏休み中盤。

アイから生えたゆらぎは成長を止めていた。

共倒れになると判断したようだ。その後、花の中央に繁殖用の種を作り始めていた。

それ秋俊も相変わらず半死状態で倒われている。

それでもアイは時折彼の名前を呼んでいる。驚くべきで紳だった。

二人の愛と醜態を見せ付けられ、完全に秋俊への執着が無くなつた美景は、リンとたちの愛情を迷い無く受け入れていた。否、自ら貢つていたと言つても過言では無い。

私も、みんなにとつての姉になりたい。みんなが苦しんでる時に私の名前を呼ぶだけで支えになれるような存在になれる――

「リンちゃん... リンちゃん... ああ... あむ、んちゅ... あんぐ... あむちゅううつ... あはあ... あん」

「美景... ああ... お尻... ああんソレ好きい」

「うん... 嘰つて、ウンチ吸つてえ... あ... 好き」

「美景... 大好きい... うつ!」

「先生え... リンさま... あ... あつ... あつああつ!」

肛門をしゃぶる私に、たちが射精する。

たちもまた、憧れの先生に欲望を吐き出す悦びを見出していた。

「せんせけえ、あたしもお…あたしの

おまんこも吸つてー ウンチ穴くちゅくちゅしてー！」

女の子もまた、美景やリンに素直な気持ちを打ち明け、身をゆだねる。そ

こにドロドロとした愛欲や劣情は無い。

「美景…怖れないでいいんだよ。この子たちはゆらぎになんかならないから」

「リンちゃん…」

リンに見透かされていたことに驚き思わず舌を尻穴から離してしまった。

「あんたも…もうゆらぎじゃない。形は人間とは違うけど、もう心が離れて離れで現実逃避と自己否定に酔うことも無いでしょ？」

「…」

「あんたがその姿でいるのはね。そう

ることが必要だから。求めなくてはなら

ないモノになつていて。そして自分の

この姿が、リンが、たちが愛しくて、かけがえの無いものになつていて

何も離らぐ事の無い信念と、目の前に

ある実話。

「ありがとぅ リンちゃん」「ちょっと、泣かないでよ」

「うん、ごめんね」

美景は心配そうに見つめている

人の肛門にキスしていった。

その様子を魔人状態で見つめている

秋俊のことなど、もはや彼女の眼中には無かつた。

「うん…でも…どうするの？」



まかせて、と言うとリンはソード型のロードを手に取り、秋俊の前にしゃがみこんだ。

「生きてる？ お、よしよし意識はあるみたいね。アイはまだ頑張ってるわよ」「う…アイ…アイ…い…」

「あき…と…しい…」

蚊の泣くような声に、アイのほうも答える。本当にすごい精神力だと美景は感心した。これが愛の力なのか。

「よし、じやあアイ。よく見てなさいよ」

まさか、殺す気？

「ちよつとリンちゃん…」

美景たちがキヨトンとしていると、部屋中に突如、二つの悲鳴が響いた。

「ひ…フ、ひいいいっ！ お、オレの…

ち、ちんば…わ…ぎやあああああ！」

「あ…あ…うああああああ！」

やだ、やだ、やだあああ！」秋俊の：

「チンボッ！ チンボ切れちやつたああ！」

やだ、くつつけ！ くつつけでえつ！」

いまや美景と同じように触手を身体から生やしている。たちの目の前に、リン

が放り投げたモノ。それは小さく腰びた秋俊のペニスだった。

「くつつけ、つて…無理に決まつてる

でしょ。秋俊は人間なんだから」

「ああああ、チンボッ、ちんば…ああああああ！」

「あああ…つ…ちんばお…つ…」

「チンボならあんたのケツから生えてる

のがあるじやない。秋俊はもうセックタス

できないんだから諒めなさいよ」

「あ…一つ、やだ…一つ、おまんこ…一つ

秋俊とおまんこ…一つ…」

アイは泣き叫びながら、自らの肛門から生えている触手を警闇みにしている。

「アイちゃん…岡島君とのセックタスだけを心の頬りにして耐えてたんだ…」

それが無くなつたとき、秋俊はもうアイには支えられる存在ではなく、愛すべき男でもなく護るべき人でもなかつた。

一抵抗も戦いもせず、ただ泣きじやくる

醜い男。秋俊を見捨てなかつた、ただ一

つの理由は、「彼のチンボだけ」。



「あはは、あははは、ちんばつ！ あははハハ
触手たちが成長し始めたわよ」
「あはは、我慢の限界になつたみたいね。また
のつ！ なんでもいいといつ！ 誰のれもいか
らあ！ ほんば入れへえ！ アハハハツ！」
眸を失ったアイは自らの意思で触手を性器に
擦り込ませ、内臓を逆流させ、爆発的な快楽に
中で狂つていた。

「先生…悪いよお…」

愛情が壊れる様子を見せ付けられたたち
は怯えている。美景は強く全員を抱きしめた。
「大丈夫よ。私は彼女とは違うから。セフクスや
チンボだけじゃない。私はあなたたちの存在全
てを愛しているから」
「私、たち、で、しょ。一人だけカフコつけない
で、よ。ほらほら、あんたたち美景に甘えるの
は後にしなさい。今はこの花の変化をキツチリ
記録しないと宿題になんないでしょ」
もう、リンちゃんたら、いいところなのに：
「大丈夫よ。私は彼女とは違うから。セフクスや
チンボだけじゃない。私はあなたたちの存在全
てを愛しているから」
「私、たち、で、しょ。一人だけカフコつけない
で、よ。ほらほら、あんたたち美景に甘えるの
は後にしなさい。今はこの花の変化をキツチリ
記録しないと宿題になんないでしょ」
しかししてジエラシー感じてるのかな？
美景はクスリと笑うとたちを促し、大き
く育ち次々と種を吐き出す花と、笑いながら劣
情に溺れる魔法戦士をスケフチさせた。
「いやー、予想以上に効果あつたねー。何の変
化も無かつたらアタシが大恥かくことだつたわ
た。リンのホップとした顔に美景の胸も温かくなつ

「あんたたち、美景が好き？」

「大好きー！」

声をそろえたたちを満足そうに眺めるリ
ン。美景は照れて耳まで真っ赤になつていて。
アン・アンタたち、羨慕みたつになりたい？ 美景
みたいに身体の形を失つても心は強く優しい人
間になれる？」「
またも声をそろえるたち。憧れとする人
たちに迷いは無い。ゆらぎなど無い。
「ありがとう。みんな。みんながいなければ私
も、あの人たちと同じだったの…本当に…あ
る美景。そしてリンとともに、身体を開く。
「これからも、私たちを見て…」
静かに形を変えていくたち。そしてリン
と美景の穴という穴に擦り込み、何度も何度も
夜が明けるまで射精し続いた。

夏休みが終わってしばらくして、美景は熱をやめることになった。たちとその父兄から、強い要望があったため、

近所の私立学校に、本物の教師として赴任することに決まったのだった。

夏休みの間に、たちが心身ともに立派に成長したことが大きな評判となり、学校側も、彼女の採用試験成績と面接での人柄で即採用を決定した。

「無料の塾も続いたからだんだってなあ……」

「身体がいくつあっても足りないでしょ。」

「触手みたいに脳みそまで分裂できるわけじやないんだから」

「身体がいくつあっても足りないでしょ。」

「無料の塾も続いたからだんだってなあ……」

「身体がいくつあっても足りないでしょ。」

「もう裏づけでいけばいいじゃん」

「ダメだよ、今日は県のコンクールでみんなが発表するんだから。引率としても気合入れなきや」

「あ、今日か。県で評価されたら全国だつけ」

「うん。だからキラチリやらない」と

キラツと教師の顔になる美景。そんな彼女の変化を目にして、つづく夏休みにあわせた観察日記をやつた甲斐があつたと、リンは嬉しく思つた。

そもそも、そのコンクールというのも、あの時、みんなで頑張つて記録した花の生態と魔法戦士の精神や肉体変化の記録で、それをグラフや映像で解説するという非常に珍しく、高度な内容だった。

「ま、最優秀賞は間違いないわね。学校に寄付した実物見本も持つていくんでしょ？」

「もちろん。運ぶの大変だけど……」

「まだアイの原形残つてる？」

「うん。アタマ壊れちゃつたけど、みんなが優しく犯してあげたし、ちゃんと食事の世話をしてくれる」

「あ、生きていた。生かされていた。セックストのことしか考えられない頭になつてしまつて、ひたすら自分の触手を子宮と肛門に突っ込んで嬌声を上げている。もう、秋優のことは何も見えないないようだった。ちなみに美景は未だに彼をバースルームで生ごみにした時のことと思い出して、こ

そりオナニーすることがある。

「美景、あたしも今日は遅くなるから」

「どこいくの？ ゆき退治？」

「いや、あつちの魔法戦士の学校にね。あたしも発表といふか、報告する日なのよ」



「…………？」
「ゆらぎと一般人が共存できるかの観察報告をね」「それって、私たちのこと？」
「そうよ。魔法戦士の派遣先も片つ端からゆらぎを横す方針を見直す時期に来る。犠牲が多すぎるのと、この時代、ゆらぎになる要因が溢れすぎて、共存せざるを得ない状況なの。ただ、その方法や情報が足りない。共存できるゆらぎと撲滅すべきゆらぎの様分けをするにもモデルケースも無い」

「そんな顔しないでよ。あんたのことを隠して実験してたわけじゃないんだから。むしろ、美景とあの子たち、そしてこの暮らしをいち早く譲るために、あたしはアツチの提案に協力したの」

「アツチの提案……ということは私たち監視されて……」「ずっとね。当然よ。魔法戦士がゆらぎと暮らしながら、仕事をゆらぎを殺すなんて前代未聞だもんね。じやないと、あんな危ない種をホイホイ持つてこれるわけないでしょ」

「……そつか……そうだよね……」
「考えてみれば当然だ。そんなこともリンの愛情の賜物だと思いつ込んでいた自分が恥ずかしい」

「だから今日の発表は大勝負なのよ。ちゃんとお嬢いさん、ア

ンタのこと……ゆらぎなんかない、アタシが愛してる『宮広

美景』だって説明してみせらるんだから」

「うん……信じてる……ありがとう。リンちゃん」

「おっと、キスは帰つてからね。お互の勝利報告したあとたつぶり、ね」

「うん」

「ビンボーン

「せんせー、一緒にがつこい」——

玄関のチャイムが鳴り、誰の声が美景を呼んだ。

「いってらっしゃい、先生」

「うん、行つてきます！」

そう言つて玄関を出ると、美景はたちと共にまぶしく光る

朝の街へ歩き出していく。

（了）

Cure Sunshine Farm

キュアサンシャイン農場
～春は一日150匹まで～

This is "Cure Sunshine" fanbook Presented by TANA@Garyuh Chitai in 2010 Winter
for Adult Only

最近、生徒の間でキュアサンシャインを育てる運営アトリガ大人気らしい

これは生徒会改としても本入としても放置する訳にはいられない



ね…蟲は…一人が一日
につき…一五〇四も…

蟲はフレンドにあ頃い
メールを送つて入れて
もらわなければならぬ…?

こ…こんな顔…声…
あ…男子も女子も
生徒みんな…ううん

一千方もいるんだから
きっと保護者も先生方も
おつて…僕の…こんな…
顔を見て…悩んでる…

ち…違うよ…こんなのが…
絶対…僕じゃない!

僕はこんないやらしい顔で…
…卑猥なこと言わぬい…
…こんなお嬢じやない…

別人だよ…二七七七七七…
だから…だから…べ…
別に僕が…蟲を入れたって…
いいよね…?

そう…僕はこのアブリガ
どんなに有害か…もうと
調べないといけないから…

款口づけにしたの
だいおじょーも
理解をあたへし
せんじゆえだ



最初は恥ずかしかったけど
今はメールをいっぱい送って
お願いするみたい

自分ではお薬を渡さない
から、これもフレンチ
魅力的な女のやうになれるもの

「薬を入れていいんだもん」
「洗濯していくぞ」
「おまわりさんへ渡しちゃうです」

もう画面の中の僕と
一緒に屋外でウニチ
するのガクセになら
ない...

過激な言葉を使えば
だいぶん攻防がぐる
なって...だめ...僕...
完全にハマっちゃった...

ああ...これ...他人じゃ
ないよ 僕...僕だよ...

見て...見て...ウニコ
わぬといじる...みんな
見てえ...つ
♥
♥
♥





フェラチオ 700円
肛門にキス 1000円
生セックス 2000円
アナルセックス 2500円

うわあ わいごと
全部買つたらまた 別のメイド一組出でさだよ

ヌフツク 300円
亜甲撃り 500円
ボディペイン特 500円
ファック 800円

野外放尿…ローション…ムチ…
パイプ…露出…食糞…マルチ…
ブレイブ…？ ああオンラ
インで舐められやだね♥



いつの間にかフレンチで一万
超えてるんじゃないのかよ♥



そして...もう...家畜の
最後のステージ...それは
オーフショット

と...おやさん...便...売られ
おやさん...家畜と
して売られるっていじめ
お隠れ! わたるの?
肉便便はされる?
わざと...もつと運ぶ...

チンポキントマ筋精...み
フレンドのみんなの精子で
妊娠している...
あ...なんて素敵な姿...
ホントにこのグーム
やつてよかったですあ
♥♥♥

だから、僕は現実の中で
一千人とフレンドになつて
みんなの恋愛家畜になること
に決めたんだ♥

そう、あんな牧場なんて
所詮はゲーム。あざとい
金儲けに利用されていただけ

もちろん無料ですか
からあ...
あかねはいりません

ねえ...して...蟲を入れて...
洗脳して...処女(マンコ)犯して
調教してください...

チンポいれて...孕ませて...
便器になります...結婚します...
なんでもします...♥

フレンドもランキンぐも
なくなりました。度つた僕は
携帯アブリなんかしない
と諭つた

このアブリは規約違反して
いるため削除されました。

じじのが
オーラクショウ直前
突然アブリは削除
されてしまった
いうやうな管理者が
迷惑されたらしく

おしまい。

namā voyage



this is nakoruru & charlotte@samurai.spirits' fanbook
presented by trans ganguh.chitai in 2007 summer
for adult only...

成年向け同人誌

「もうすぐ日本に帰れるよ、ナコルル」

「あ、はい……」
ベッドに横たわる私に、優しく微笑むシャルロットさん。
「もうすっかり髪も良くなつたようだ。あのとき、キミを見つけた時はもうダメかと思ったが……本音によかつた」「はい。ありがとうございます。私もあの時は……」

「あの時、アンブロジアを滅ぼす最後の戦い。なんとか勝つたものの血、死を覚悟し、目を閉じ、意識を失つた。意識が途切れ直後に、シャルロットさんが私を見つけ、助けてくれたのだという。この船は彼女とその仲間が日本をはじめ、東方諸国を調査をするためのものらしい。重傷の私を運び込んだまではよかつたが、回復するまですつと滞在するわけにもいかず、結局、そのまま出航してしまつた。それ以来、もう半年以上ここでお世話になつていて、本当にありがたい。心底、彼女には感謝している……のだけど……」

「さ、脱がすよ。」「いいじゃないか。いい色だよ。うん」「でも……恥ずかしい……」
「ははは、何をいまさら。この数ヶ月、毎日見ているじやないか。大便どうろか、はみだした内臓だつて見ているのに」「わああ！ い、言わないで下さいよ。うつ」



「そう、私は傷口が開くことを防ぐため、基本的に寝たきり。食事も、治療も、運動も、そして排泄も……すべて彼女が世話をしてくれている。おかげでベッドの寝心地には慣れたもののこうして毎日『おしめ』の中に出したおしつこやウンチを娘しそうに見られるのは……慣れない。おの危篤状態をこうしてわざと食べたものが出ること。あの危篤状態を知つてゐる者にとっては、それだけでも嬉しいものさ。それとも私以外の船員に着替えをさせるようにしようか？」

「そ、そんなあ……」「ハハハ、冗談だつて。本当に可愛いね、キミは。あんな化物を例した形容には見えないよ。キミは強くて、美しい。私も将来、ナコルルのような娘が欲しいな」

「まあ、無理だろうがね、と苦笑する彼女の顔は、言葉とは裏腹にまさに母親のそれだった。自身では意識していないかもしれないが、幼くして村の巫女として甘えることを許されず、生きてきた私は、何もかもが彼女の手で汚されているこの状況が、とても新鮮で愛しい時間に思えていた。

「さ、拭くから足を開いて」

美しい彼女の指を布越しに感じる。お尻とアソコを…ゆつくり撫でて綺麗にしてくれる。ああ……気持ちいい……。「気持ちいいかい？ すまないね。調査がなければもっと頻繁に身体を洗つてあげられるんだが」「いえ……そんな。これ以上の迷惑は……ああ……」

「言えない……本当は……本当は一日のうちに、この瞬間が……一番待ち遠しいだなんて……。シャルロットさんにウンチ拭いてもらうのが恥ずかしい一番の理由は……お尻が気持ちよすぎてアソコがすごく濡れてしまうからだつて……。ううん、最近はもう、あなたのことを考えながら……はしたなくお漏らししてゐんです……」「……ハしてないよね……。ウンチで気持ちよくなっちゃうなんて……」



す
ん
あ

う
ん
い

う
ん
い

う
ん
い

う
ん
い

う
ん
い

う
ん
い

う
ん
い

そんな日々を送りながら船旅は順調に進み、いよいよ、明日には日本へ着くという日がやつてきた。傷のほうもかなり癒えた。正直な話、もう、彼女の手を借りなくとも最低限の日常生活は出来るほどまで回復していただけど、すっかりクセになってしまった私は、相変わらず彼女に排泄物を処理してもらっていた。

別れのことを考えると胸が苦しくなる。これは、染み付いてしまった甘えグセのせいだけが原因ではない。お互いの故郷のことを語り合う日々の中で、異国へわずかな憧憬が芽生えていた一方、その遠さに軽い衝撃を感じていた。私がこの船を降りることは、即ち今生の別れになることを意味している。

(私…シャルロットさんから離られるのかな…)

もっとお話をしたい…少しでも未練を無くさなきや)

最後の夜、私はシャルロットさんの部屋を訪ねた。

小さく戸を叩いても返事はない。ただ、中からはかすかに声が漏れていた。鍵は…開いていた…。

「ナコルル…ああ…いいやだ…いやだよ…」私は、

キミが好き…ああ…」チンボ…キンタマ…ふつて小さく戸を叩いても返事はない。ただ、中からはかすかに声が漏れていた。鍵は…開いていた…。

「ナコルル…ああ…いいやだ…いやだよ…」私は、

お尻の穴に…私のウンコチンボ入れて射精したい…。

「ああ…」イクッ！ ナコルルのウンチ好きだよお…」

小柄で愛らしい姿、彼女の股間に巨大な男性器があつた。肉棒も大きな球も痴便と白濁液まみれ、彼女がそれらをこすりつけているものは、私の排泄物をたっぷり包み込んだオシメ。

それだけではない。彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

三つ！ 動き子…ボから射精しながらブリブリウンコひり

出るよ…出てるよ…」舐ぎつてるうつ！ ああ…

私…私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

三つ！ 動き子…ボから射精しながらブリブリウンコひり

出るよ…出てるよ…」舐ぎつてるうつ！ ああ…

私…私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

「ああ…」私も見て欲しいのに…キミに毎日見て欲しいのに

ああ…」彼女もまた…その中に脱糞していた。

泣きじやくりながら私を求めていた。汚物と涙にまみれた

その姿には高貴さの片鱗も見当たらない。

「あ…ナコ…ルル…」

シャルロットさんはそう言うと絶句する。彼女の視界に

姿を現した私を凝視して、肉棒の先からはピュクビュクと精液があふれ出ている。私は一步一歩彼女に近づいていく。

自分でも不思議なほど足取りはしつかりとしていた。ただ、胸は痛いほど高鳴り、股間は焼けるように熱い…。

「シャルロットさん…」

「あ…ダメ…ナコルル…見ないで…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」

「あ…」



「ああ…すこ…大きい…」
性交の経験はなくとも男性器くらい知つている。そして、彼女のそれが常人のよりも、はるかに大きさであろうということも、そして僕使に興奮して射精することが異様なことである、ということも、しかし、私は一切の嫌悪感も恐れも迷いもなかつた。
「シャルロットさん…私のウ・ンコで興奮してくれたんでね…こんなに…ああ…精液…シャルロットさんに精する」とが異様なことである、ということも、しかし、私は一切の嫌悪感も恐れも迷いもなかつた。
「シャルロット…ううう…すまない…私は、キミの世話をしながら…毎日こんなことを…あ…う…」

「謝らないでください…私…嬉しいんです…んつ」「うあつ…な…ダメ、汚…いつ」

「そんなことないです…シャルロットさん、さつき言つてしまつたよね、しゃぶつて欲しい…うつて」

「そ、それは…」

「んつ…んぐ…ちゅ…美味しい…」
「ああああっ！ ああああっ！ チンボ…いいっ！ ナコル…が…ウ・ンコ…私のウ・ンコチンボなめてるつ！ ひあああ！」

美しい騎士の唇からつむぎ出される卑猥な言葉が私の身体に降り注いでくる。それは全身を甘く貫いた。後に蜜のようになけて身も心も蕩けさせていつた。

「呼…もつと、もつと…欲しい。」「シャルロットさん…教えて下さい。言わせて下さい。お願い…します…」

「本当に…いいの？」

「はい…あの…私が舐めてる…キンタマ…って言うんですよね？ それで、これが…チンボ…」
「そうだよ…ナコル…私のウ・ンコでくちくちゅになつたチンボ…ウ・ンコ大好きチンボとスケベな精液袋…ケツ穴の二オイに興奮する変態キンタマ…」

「ウ・ンコ大好きチ…ンボ…スケベ精液袋…変態キンタマ…ああ…美味しい…ウ・ンコキンタマ、変態チ…ンボ…美味しさ…ます…私…も…ケツ穴ウ・ンコの二オイに興奮します…アソコが…熱い…濡れてる…」
「ナコル…うううつ！ あああっ！ マンコ…おマンコ濡らしてるんだね…ナコルも変態マンコなんだ…」「まん…まん…あ…う…」、「マンコ…っていうんですね。チ…ン…ボ…しやぶつ…ウ…ン…コ…精…液…舐…め…濡…ら…し…ち…や…う」ところ…私の変態マンコ…あ…ん…」

「ナコル…私…も…私…の…マン…コ…も…う…」

キンタマ袋を持ち上げると、そこにはシャルロットさんのマンコが、くちくちよに濡れている変態マンコが息づいていた。さらにその向こうには戻使をひり出したばかりの肛門が膣波に濡れて光っている。「あむ…んつ…」、「シャルロットさん…する…」、「チ…ン…ボ…も…マン…コ…も…ケ…ツ…穴…も…」、「キンタマ…も…持…つ…て…る…」、「ん…つ…も…つ…つ…と…ず…つ…と…あ…の…ベ…ド…と…早…く…言…つ…て…い…た…」、「さ…ら…に…そ…の…向…こ…う…に…は…戻…使…を…ひ…り…出…し…た…ば…か…り…の…肛…門…が…膣…波…に…濡…れ…て…光…つ…て…い…る…」、「あ…な…た…を…感…じ…ら…れ…た…の…に…」、「便…器…に…だ…つ…て…喜…ん…で…な…」、「あ…ん…む…つ…」、「ケ…ツ…穴…あ…」、「あ…ぐ…ち…よ…で…あ…つ…た…か…い…ん…う…」



シャルロットさんのマンコやケツ穴、チンポに塗りたく
られたいた糞便を綺麗に舐めとる間に彼女は何度も全身を
痙攣させてチンポ汁を部屋中に放つた。

「シャルロットさん…気持ちいいんですね…」

「いつもの逆。涙目だった彼女も、そこでようやく微笑ん
だ。嗚呼、やはりその表情が一番素敵…」

「ナコルだつて…いつもウソゴ拭くときにマンコを濡らし
てたじやないか。クリトリスも勃起させて、気づいてない
とでも思ったかい」

「やだ…バレていたんですね…」

「ああ、キミの身体を拭きながら、キンタマとチンポが疼い
てたまらなかつた。ウンチまみれのケツ穴に、マンコに今す
ぐ突っ込みたい…思い切り射精したつて思つたんだよ」

「シャルロットさん…今度は…直接…」

「ああ…夢のようだよ…ナコル」

見られる人の目の前に、自らさられ出した肛門と性器。
見られてる、身体が震え、お腹が蠢く。

「あ…す…い…やだ、いっぽい出そう…」

言ひ終わぬうちに、熱い糞便の塊が肛門を押し抜けてブ
リューブリュと下品極まりない音を立てながら出てくる。ああ
うんこ…して…人前で…私…」

「あああ…す…く…出てるうう…」なんで…いつも…ん
なに出ないのに…」止まらない…あ…出してる…」

シャルロットさんの身体から出してるうつ！」

「あつたかい…ううん、熱くて…チンポがやけどしてしまいます
うだ。せつかく綺麗に舐めてもらつたのに、もうチンポもキ

ンタマもウンチまみれ…あ…ウンチセンズリ気持ちいいよ
ぶちゅつ、ぬちゅつ、と漏つた音が聞こえる。ああ、シャ
ルロットさん…塗つて…んた…私のウンコ、勃起チンポで
犯されてる…」いや、私が犯してるのはかな…」

「はあ…お尻…たまらない…」んああ…」

ムリムリと大便に脚踝をこすられ、腰から下に甘い痺れが
擴がる。ジョボジョボとベッドに失望しながら私は追り来る

快感の波に身を委ねた。

「イクんだね、ナコル…」ウンコしてイッちゃうんだ。
私に見られてチンポにぶつかけてイッちゃうんだ」

「イク…? これが…イクってこと…あ…」

「そうだよ。さあ、一気にひりだしてイフ…」らん。私に
ナコルの…愛撫ウンチ剥上のはしたない姿を見せて…」

「は…い…んあ…ああ…あ…イク…イク…見て…」全部、
いっぱい…ケツ穴のウンコ、見て…」

「ああ…あ…あ…」らめえ…やだ…イクの…」まらな
ヒッ！ あ…あ…こんな…す…す…んおおお
つ…また…また…ケツ穴のウンコ、見て…」

「す…い…ん…ん小さな身体に…いっぱい溜め込んで、毎日これ
くらい出して…ふふつ、私もとっくに我慢できなくな
つて…」



「嗚呼、とうとう日本へ着いてしまうんだ…。
「お別れ…だね」
「お別れ…だね」

「イヤだ」——このまま離れてしまうなんて…絶対に。
「シャルロットさん…最後に…」
私は自ら、脚を開き透か女マンコを指で開いた。ここ
は座女として適らなければならぬ場所。シャルロッ
トさんもここだけは犯さないでくれた。だけど…
「私、あなたと一緒にいるなら…すべてを捧げます。
我慢でごめんなさい。だけど…もう、私、あなた無し
では生きられない…」

「このまま、日本を離れて私と来てくれると言うの？」
「ほい…放擲のみんなは好きです。愛しています。でも、
それよりもあなたのことを愛してしまったの…お願い
します。私の処女をもらつて下さい…そして、私をこれ
からもあなたのチンボ穴としてお傍において下さい…」
本当ならば永遠の伴侶として…と言いたい。だけど…
そんなおこがましいことは口が裂けても言えない。私は
肉穴でいい。便器でいい。性欲を満たす道具でもいい。
ただ、あなたといたい。
「ナコルル…ハカナ」と言うんじやない。そんな弱い
ことを言うキミは、私の妻にはふさわしくないよ…」
「妻…つて…シャルロット…さん…」
「さん、は要らない。シャルロットと呼んでくれ
無理だつた。呼べなかつた。口を開いても嗚咽しか
出てこなかつた。幸せすぎて私は泣いていた。それは
一人の「女」として初めて流した涙。

「ああ…んつ…シャルロットお…おマンコ…いい…」
私も気持ちいいよ…ナコルルの処女マンコ。素敵だよ。
ケツ穴とは全然違う…またキンタマ疼いてきたよ…
ええ、チンボが大きくなつてきてるの…感じます。
私のウンチ穴に入つてたチンボ…子宮まで届いて…」
ゆつたりとした性交。先ほどの交尾とはまつたく
違つたゆるやかな喰み。ああ、これが夫婦になると
いうこと。女の悦び。本当のおマンコ。本当のチンボ
の快楽。

「素敵…私のマンコが悦んでる。離したくないって
チンボにしゃぶりついてます…」

うん、早く精液を出してつてせがんてる。ふふ、初めて
のチンボなのにナコルルのマンコは貪欲だね

「はい…たつて…私…変態ですもの…」

愛する人の腰に足を絡め、口付けを交わす。

「イク…ああ…子宮にチンボ汁…全部出すよつ
キントマセ…えきで…あああ、イ…く…う…」

ドクンドクンという心地よい律動。マンコだけでは
なく身体全体が一瞬にして作りかえられていくような
感覚が静かなさざ波となつて私を覆い尽くし

私たちの航海は幕を下ろした。

「ただいま、ナコルル」「わかれりなさい、シャル」
あれからもうすぐ一年が経つ。私は船を降りてからも毎日シャルと濃密な「セックス」を重ね、無事に妊娠することが出来た。お腹の子供の名前は……まだ決めていない。ここがシャルの故郷「ふらんす」ならば彼女に一任するのだけれども……
「ああ、さすが姉妹だね。キミにはまだまだ及ばないものの、いいスジをしている。他の子供たちもかなり上達してきたよ。『ねえ、赤ちゃんはまだア』って急がされるのは困るけどね」

ふふ、あの子たちったら

そう、ここは私の故郷。あの日、シャルは私を連れて船を降りてしまったのだった。驚く間にシャルは苦笑しつつ、事情を説明してくれた。

シャルの故郷では大規模な革命が起きて、非常に政情が不安定だということ、そしてシャルたちは国内が内乱になる直前に東方諸国調査という名目で「脱出」した貴族の一團だつたらしい。もちろん、調査はしているのだけれども、それは帰国した際に「元貴族」ということで捕らえられ、処刑されるのを防ぐため、希少価値の高い成果を持つていなければ必要性が本当の理由だった。

私は—— 諸君した。
私はすでに巫女としての資格を失っている。それに異国の血を引くシャルを村人たちは受け入れるだろうか……。「ダメならいいさ。二人で旅でもして……」とか移らせる土地を探そう。それもまた楽しいんじゃないかな
シャルの心強い言葉に頷き、私たちが故郷の村へと向かう。その結果私は帰郷を祝福され、シャルは

ささらに言えば、地理の調査よりも、日本をはじめとする諸国で収集した貴金属や装飾品、刀剣や絵画、文献、そして財宝のほうが大事だった。なぜなら、それらは即ち母國で元・貴族の安全と地位を護る「縛」だったからだ。

そんな地へ私を連れて行つたところで、身の安全は保障できない。新しい権力者に奪われてしまう危険もある。だからシャルはこの地で暮らす決断した。しかし私が語った故郷の話を聞いて、「私が『ふらんす』で元・貴族の安全と地位を護る『縛』だったからだ」という

ただ不思議なことが一つ。シャルの身体のこと：誰も何も言わないで受け入れられたみたいだけ……なぜかな？ 私が妊娠したときも、祝福されただけで、みんな驚かなかつたし……私は何も言つてないけれど、もしかしてシャルが自分でチンボとかキンタマついてるって言つたの……？

「チコ、今夜も……いいだろ？」チンボがほら、こんなに勃起してるんだ。キンタマ汁、ナコのケツ穴に出させてよ」「あん……もう……」毎日あんなに感じじちゃつて……ウンチするだけで何回もイフちやうようになつたんだよ

「はは、そんなに困つたぶりりしてもダメ。毎晩あえぎまくつて自分からチンボ欲しがるくせに」「シャルう、早く、ナコのクリソ穴にチンボ汗をちまけてえ」だとか「シャルのケツ穴美味しいよお。このまま口に出てえ」とか

「わわわわ、言わないでよお」

西洋の知識、騎士の行動力が、毎年村を襲う災害を防いでいる。理由は何よりも、その魔とした性格。何事も慣習と祭事に頼り切る風潮があつた村にあつて、まず巫女や祈事に頼る前に災害や疫病の予防を自らの手で行う努力を説いていた。もちろんシャルも、この地に伝わる医術や薬草を調べたり、伝統のよいところは自らも取り入れる。今ではすっかり村の服装がお気に入りになつていた。

村人の中心となつてゐる。理由は、何よりも、その魔とした性格。何事も慣習と祭事に頼り切る風潮があつた村にあつて、まず巫女や祈事に頼る前に災害や疫病の予防を自らの手で行う努力を説いていた。もちろんシャルも、この地に伝わる医術や薬草を調べたり、伝統のよいところは自らも取り入れる。今ではすっかり村の





HONEY CATS

This is a "soiphon&yoruichi@BREACH" fanbook
Presented By TANA@Garyuh_Chital in 2006 Winter
for Adult Only...

旅宿の騒動は藍染一派の裏切りという形で収束した。尸魂界は外見上は従来の姿を取り戻したもの、平稳の中にも常にどこか緊張感が漂っている。

本来ならば謀反に対しては我々、第二隊が責任を持つて対処せねばならないが、今回の件に関しては我々だけではどうしようもなく、また同時に、反乱の種を事前に察知できなかつた責を負わされることも無かつた。

当然、その一味であつた四楓院夜一も同様に。

しかし、あくまで彼女が赦されたのは旅宿としてであつて、それ以前の失踪については別の問題として扱われ追放処分は今後も継続される。

だが、私たちは以前のようにバラバラになつたわけではない。めぐり合い、戦い、そして再び心を近づけたことで、新たな関係になつた。

仇ではなく、主従でもなく、友人でもなく、恋人でもない。

そして、今日は彼女——夜一様がお忍びで尸魂界へやってくる日。私に会うために来て下さる日。いつもの待ち合わせ場所である夜一様の作った秘密の訓練場所に向かう私の胸はひどく高鳴っている。

なぜなら、私に会いに来る夜一様は尸魂界でも人間界でも、誰にも見せたことの無いであろう姿で私を持っているから。

そして私もまた、誰にも見せたことの無い私になつてしまふから。



天賜兵装番・西瀬院家の秘密：それは女性にも
男性の生殖器を生やすことができるうこと。
軍隊という死と背中合わせの職にありながらも
血族を絶やさぬことを求められる故の身体

夜一樣は血族の中でもひときわ大きなベニスを持っています。大きさだけではない、精液の量も二オイも味もケタ違いに濃い。

お、遅いぞ
そ、辟諱つ！
ここ、こんなに…
チンポ汁た、溜まつて
しまつたでは
ないかっ！

ほーけいチンボ袋の中がぬちゅぬちゅじや！
全部飲んでくれ
クヒ！アヒいいつ！

ああ…くさい…チンボくさくて…頭の中が
真っ白です。夜一樣：私の唇、気持ちいい
ですか？ ピクピクって跳ねて…ああ…
こうして精液を舐めているだけで、軍団長
として張り詰めていた気持ちが、蕩けてい
くよう…温かくなつてきます…んあ…
美味しい：美味しいです：もっと、夜一樣
のチンボを味わいたい…

もうダメです…身体のほうが
我慢できません…。もっと
思い切り舐めたい…飲みたい…
チンポ汁を私の中に射精して
欲しいんです…



よいぞ…つ！ んおおつ！
砕蜂 もつと下品に音を立てて
尻を握つてオナニーしながら
チンボしやぶるんじや…つ！

だ、出すぞ…つ

んあつ！ 来た！ 出たあつ！
これ…久しぶりの精液…つ！
美味しい…あ…泣けてくるほど
美味しい…愛しい…



唇が舌が歯が喉が喉が胸が
胃が…脳までも…夜一樣の
チンボに犯されて…イツ…
いくううううう…つ！





精液費便を一滴残らず吐き出したあと最悪な姿を最も愛しい人に見られたショックで、私は泣き出すことをやめられていた。夜一樣の手で身を清められる光榮。幸福感で再び失神してもおかしくないシチュエーションだつた——本来ならば。

「すまなかつた。調子に乗りすぎた。本当に申し訳ない。ゴメンナサイ 軍團長様」

「……」

「いや、なんというか……会う度におぬしがアンアン囁いて可愛くなつていくのでな……つい出来心で、ものすごく恥ずかしいことをしたら、どれだけ女っぽくなるか……と思うてな……」「女らしくなくてすみません。私たつて前軍團長が出来てしまわなければ、こんな可愛いのないになつていなかつたかも知れませんが！」

「やれやれ、おぬしには恨まれてばかりじやな……」

「恥ずかしかったことは確かだが露ほども恨んでない。いるはずがない。今日の恥辱もあの日の悲しみも。

「なあ、雀蜂」
不意に背中に感じる夜一樣の体温。温かく強くしなやかな背中が密着し、優しい鼓動を伝えてくる。
「一緒に、来るか？」
「……夜一樣」
驚いた。百年前からずっと待ちわびていた一言だつた。

「……何故ですか」

だが、私の驚きはその言葉に対してではなく、自分自身の心に対するものだつた。なぜだろう。飛び上がつて喜び涙を流して彼女抱きついてもおかしくないはずなのに。「何故…か。ふふ、そうじやな…おぬしが愛しいのか、」
恥くなつたのか…はつきりとは分からぬが、ただ、あの日以来、おぬしの存在がわしの中でききくなり続けている。
「あの日、私は改めて夜一樣の力を思い知らされました」
「じやが、おぬしが強くなり、わしが喜んだのも事実。あの戦いの中でおぬしから突きつけられた現実は本物じや。おぬしに『夜』と呼び捨てにされ自打で負かされ雀蜂で追い詰められた。それは全て今までに経験したことが無いもの。恐怖と驚き、屈辱。

しかし、それに勝る喜びも確かに感じていた

「……」

「おぬしが成長したことが嬉しかつた。それと同時に…寂しくなつたのかもしれない…。こうして会う度におぬしを確かめている自分に気付く。おぬしへついに過激なことをしてしまうのは、決して悪ふざけだけではない。わしの知らない雀蜂になつていくのが嫌で、自分の手でおぬしをコントロールしてしまいたい、と思っている——のかもしもされぬ」

嗚呼、なるほど。そうか私は成長しているのだ。

そして今まさに自立しようとしていたのか。二人の関係をどう形容していいのか分からなかつたはずだ。会う度に、否、会えない間も日々私たちの関係は変わつていていたのだから。夜一樣の誘いを静かな悦びを持つて受け止めていたけれども、私が彼女のいない世界で過ごした世界で成長していた時間の為せる業であり、必然でもあつた。

「ふふ、こんな告白をしても失望されるだけじやがな…」「……そんなこと、ありません。素直に、嬉しく思います。ですが、やはり…私はここで生きていきます。戦いながら、悲しみながら、苦しみながら、夜一樣を想いながら、部下や仲間と共に。自分の足で生きていきます。申し訳ございません」

「いや…そうじやな…変な」と言つてすまなかつた

背中合わせの夜一様が離れていきそうな気配を感じ、私の手は湯の中で無意識のうちに彼女の手を握っていた。

「私は、ここにいます。ずっとここにいます。夜一様について行くことは出来ませんが…どこへも行きません。私は絶対に夜一様の手を離しませんから……」

「夜一様……」

夜一様が同じ力で握り返す。

「初めてじゃ。こんなにも人を尊敬したのは、そして愛しく思えたのは、ありがとうございます……夜一様」

「こちらこそ……」

しばしの沈黙。ようやく訪れた幸福感が私たちを包み込んでいた。ずっと一緒にいたい。でも、それは許されない。もう私たちの関係は百年前に戻ることは出来ないのだ。

「夜一様……ひとつ頼んでもよいか」

静かに夜一様が切り出した。

「…はい。私に出来ることなら何でも……」

「蜜蜂で、私に蝶紋章を刻んでくれないか」

度ばかりは、心臓が跳ね上がった。

「ふふ、別に死にたくなったわけではない。おぬしをすつと感じたい。その辺が欲しいと思つただけじゃ。あれはおぬしが生きている限り消えぬのだろう？」

「…」

考えもつかなかつた。死の刻印である蝶紋章をこんな風に受け入れることが出来るなんて…。

「離れていても、おぬしの命を感じていていい。おこがましい願いだと

分かってはいるが、これ以上わしは弱くなりたくないのですな」

背中合わせの苦笑。私もまた感じていた。刻々と変わりゆく夜一

様への寂しさと、嬉しさと、変わらない愛しさを。

「分かりました。でも、もしその辺に安心して…会いに来て下さらな

くなつたら、地の果てまで追いかけ、一撃目を打ち込ませていただ

きます。もちろん浮気したときもです」

「ははは、そんな恐ろしいことをする勇気などないぞ」

「あと、今度また無茶な…今日みたいなことをした時も、遠慮なく

我らせて頂きますので」

「あ…えーと…」

「ここに行くんです？ 逃がしませんよ」

思い切り手を握り、引つ張ると、ようやく私たちは真正面から見

詰め合つた。互いに赤面して微笑を交わす。

「それと…私からもお願ひがあります」

「なんじや？」

互いに寄り添い、しっかりと抱き合い、静かに唇を重ねた。

「いつか、その時が来たら…私の身体にも辻をいただけますか」

「…はい」
新しい命。
それが宿つたとき、私はまたひとつ女になる。そして私の新たなや、夜一様と私の未来がはじまるに違ひない。

あまり華美な服は恥ずかしくて
着られない、と言うけど下着は
つけずに肛門にもバイブを
咥えこんで外出しているのが
北マゾブタの性(さが)だろう

紅音さんと街に遊びにいった
普段の巫女衣装もいいけど
こういうスケーツもステキだ

私の尻でイきなさい♥ After Story

僕は驚いた
とつてキスは「特別な行為」になつ
っていたから

そんな紅音さんが顔を
赤らめながらつぶやいた

「ねえ…琴一さん…
キス…して欲しい…」

それを彼女のほうから
こんな街中でせがんで
くるなんて!!

僕と一緒に暮らはじめて
以前よりもますますクソん穴
マゾ奴隸になつた紅音さん

お腹が妊娠のよう膨胀らむ
ほど注入しても彼女は悦楽の
あえぎ声を漏らす

毎日のナルセックスに
よつてケツ毛も濃くなり
毎日浣腸をおねだりする
ようになつた

でも その先 大量に
脱糞するところだけは
見せてくれない

いつも排便だけはトイレで
させて、と頼んでるので
僕も従つていたんだけど
今日は勇気を出して言ってみた

「紅音さん 今日からは
全部見せてもらうよ

「ダメ…それだけは…つ
ダメなの…あなたに嫌わ
れてしまうから…っ！」

「絶対嫌わないよ どんな
ウンコだろうと紅音さんの
ものだから…」

違うの…違うの…私…
昔のことを…あの男達の
ことを思い出してしまって
のおつ！」



それでも僕は引き下がれなかつた。彼女をアイツから教うたために絶対に負けられない

「紅音さん、これからは僕があなたを奴らよりもっと激しく調教します」

そしてトイレの中でキスをした

彼女の我慢が限界に達して大量の糞便が排泄される間もずっとキスをしていた

美しい彼女からは想像できないほどの太さ・量・下劣な音

そして便器からはみ出すほどの勢いでひりだされた糞便のニオイが瞬く間に二人の胸に満ちていく

「孝一さん…チンポ…勃起…す…い…す…い…こんなの…あ…」
キスで口をふさいだことで鼻で呼吸をするたびに汚臭が流れ込み、それを吐息とともに互いの口に流し合う

紅音さんが僕の股間をまさぐり、硬くなつたペニスを愛しそうにじくじく

今度は僕のほうが我慢の
限界を超えてしまった

紅音さんをその場で押し
倒し排泄したばかりで
敏感な肛門を激しく犯す

レイブするように容赦なく
えぐり 突っ込み 引っこ
抜いて またブチ込む

紅音さんの泣き叫ぶような
あえき声がトイレに響き
かつてない興奮の中 何度も
膣内に射精した

「琴一さん...ああ...つ

もつと...もつとおつ！」

「紅音さん...つ！ 好きです
…大好きです もつともつと
ひり出して くつきいウンコ
ブリブリ出してくださいつ！」

「あああ…見て…喉いで…
汚らしい豚の全てを…
あああ！」

セックスしているうちに
彼女はいつしか自らの
費便に顔を寄せ その
香りに興奮していた

「あああ…汚い…臭い…
んはあ…ああ…す…いの…
情かしい…」の感じ…」

「お願い…します…琴一さん…
して…私の顔を…ここに…
あの時の記憶を消して…」

「はい 喜んで このからは
摸乳しじや排泄できない
身体にしてみせます」

そして僕は彼女の頭をゆっくりと
踏んで 紅音さんの美貌を費便
の中に押しこんだ

その日以来、彼女は僕の前で排泄をするようになった

「んお…おふ…んぐう…
んはあ…琴一さん…キス…
んうう…あ…気持ちいい…」

排泄のときはすつと甘く
キスをかわすこと
そして専用便所藏にまたがつて
イキ狂いながらブリブリ排泄する
姿を境内で見せ付けるのが二人の
ルールになつていった

大量の脱糞物に身着け
無言で見とれている。そして
紅音さんの汚臭を吸つて
欲情している

「おふ…んおおおーーーっ！
んおう！見で…ウンコ…
見てくらひや…あああつ
い…イ…イ…ク…うううう！」

紅音さんもまた キス脱糞なし
では満足できなくなつていた
もう彼女の脳内にあの男達の
影は無くなつっていた



まさにパロフの犬と
いうヤツだろ

排泄絶頂のキスに魅了
された紅音さんはとうとう
キスをするだけで無意識に
排泄したくなる身体になってしまっていた

「紅音さんほらウンコの
ニオイが好きなのは分かるけど
お掃除に来てくださつての方々に
ちゃんと顔を見せてあげないと」

「んおおお…んー…ぶほつ
んほお…おふううつつ！」

肛門セックストキスそして
露出脱糞を一日中繰り返して
紅音さんは何度もイキまくった

少しでも多く汚臭を吸い込めるように
鼻フックとボールギヤグをはめて
マゾ便器の喜悦に染まつた美貌を
晒す

だからこそ こんな場所で
彼女がキスをおねだりしたこと驚いた

今まであくまでマソブタ
調教のために僕の意思でやっていたことなのに

「いいの？ 紅音さん
ここは神社じゃないんだよ
街のど真ん中で…したいの？」

「キスだけじゃないの…もう…
たくさん的人が周りにいるだけで…
…ンコしたくなってしまうの…
だから…ね…お願いします…」

「うですか 分かりました…
でも ゆっくり楽しむために
こつちで…」

「あ…ん…うん…
路地裏へ少し入ったところで
彼女にキスをする

「ここなら大通りから姿は見え
づらいけど音やニオイは気づ
かれるかもね…」
「ああ…んあ…出そう…んう…」
「これからデートのたびに
少しずつ 人の多いところへ
移動していくこう そして最後は
身体中に塗りたくった姿で
家まで歩くんですよ」

「ああ…ひどい人…まだ…まだ
私を調教するのね…ああ…出る
…出る…ああ…つ」

謹しい音をビルの谷間に
響かせて紅音さんは大量の
費便をふちまけイキまくった
もちろんこのあとたっぷりと
味わうであろう野外アナル
セックスへの期待に胸を
ときめかせながら

END

夜伽小嶺

ヨトキハナシ

イラストストーリー02

部長さんの放課後

しかし、彼は何も言わず手も触れない
どころか近寄りもしない。毎日、放課後
に現れては私を「私だけを見つめている。
彼の表情にはただズボンの中のペニスを物
起させて。私のオナニーを待っていた。

「あ……あ……いやあ……」
露出オナニーは、つまるところ誰かに
見られたいという欲求。それを彼は満た
してくれている。しかも、手を触れない
ことで、その欲求が消えることもない。

私はついつかその奇妙な隣属に溺
れていった。ただ、彼は私がオナニーを終えて
シャワーを浴びに行くと、平均台に
近づいてきてペニスをしごく。そし
て私の愛液に濡れた場所に亀頭をこ
すりつけ射精する。今度は私がコ
ソリとそれを見ている。

「ああ……私はドキドキしてる……やだ……チ
ボ欲しい……アイツのチンボ欲しい……で
も……でも……」
結ばれた途端に、この関係が終わって
しまうのが嫌だった。近くで遠い恋心。
そう、私はいつのことを……好きになつ
ていた。
「ああ……愛恋なのに……気持ち悪いのに……好
き……大好きなの……」
私は切なさに泣しながら、全裸になつて
彼の精液が染み付いた平均台にまたがり、
再び愛恋オナニーに溺れることしかできな
かった――

(また見てる)
放課後、新体操部の練習が終わって
私は汗に塗れた身体のまま平均台にま
たがり、腰を振っている。部長とい
う立場でありながら学校内で愛
撫的なオナニーをしていることを言
ふられたら、私はもう学校に行けな
い。しかもあんな男に弱みを握られる
なんて人生そのものが破滅してしま
う。正直、生きた心地がしなかつた。

一ヶ月前、私は秘密の習慣だった露
出オナニーを目撃されてしまった。部
長といふ立場でありながら学校内で愛
撫的なオナニーをしていることを言
ふられたら、私はもう学校に行けな
い。しかもあんな男に弱みを握られる
なんて人生そのものが破滅してしま
う。正直、生きた心地がしなかつた。

あとがき

久し振りの小説中心の同人誌でした。
二次創作の再録中心とはいえオリジナル作品も織り交ぜて、漫画・小説・イラスト…となかなかカオスな内容だったと思います。

内容的にはけっこうハードですね。
コミケの会場限定本はいつもずっと
内容にしようと思ってフタナリにしろスカトロにしろ容赦なく描いてました。
それをいざ一冊にまとめてみると…すさまじいことにw

なんせ 2006年の冬コミで描いたもの
からの収録ですので、現在と絵柄がかなり
違っているところもあり、予想以上にレタッチを加えてしまいました。
特にナカル本やブリーチ本に関してはまるごと書き換えたところもあり。

会場限定本はコミケ会場で新刊を購入して下さった皆様に無料でお渡しして
いたものなので、本来、再発行はしないスタンスでした。

しかし東北・関東大震災が発生し、少しでも多く義援金を送るための一つの方法として、手持ちの素材を総集編としてまとめよう、という企画を実施することにしました。

各イベントでわざわざ会場まで来て下さった方々には申し訳有りませんが、
今回はご容赦ください。

突貫工事で再録作業を進めたゆえにいろいろ至らない点もあるかもしれません
が、濃密なエロを楽しんでいただければ幸いです。

では、また。(>_-<)

2011年06月19日 TANA

【奥付】

発行：我流痴帶
著者：TANA
2011年06月19日発行
e-mail : garyuh@tana00.sakura.ne.jp
URL : <http://tana00.sakura.ne.jp>
印刷：しまや出版

※ 18歳未満の購読・閲覧を禁じます。

※この本の内容を無断で転載・複写・WEBなどで配布することは厳禁です。

